おわりに

本調査は 2019 年 3 月から始まり、100 人目となる 2025 年 1 月までの間、一人ひとりとじっくりと向き合い、オンラインも含め、ライフストーリーを語っていただいた。調査にあたっては、練習場所、勤務場所、キャンパスライフを送る場所、生活圏に近い会議室などを訪問することで、背景となる生活も含む雰囲気を把握することができた。生活の中にスポーツがどのように取り込まれていったのかを言語化するために、時には過去の嫌な思い出に触れることもあったが、私どもの問いかけに丁寧に耳を傾け、素直な言葉で語ってくださったことに、この場をお借りして感謝の意を表したい。

さて、本調査期間中に2つの東京大会開催決定・実施があった。それは、パラリンピックとデフリンピックである。パラスポーツやデフスポーツにかかわる国際大会の開催決定は、第6章にも記載があるように、選手強化をはじめとする支援体制、大会開催に向けた国の施策に大きな影響を与え、障害者のスポーツ環境を劇的に変化させた。さらに、スポーツ基本法と第3期スポーツ基本計画には障害者のスポーツを推進するための文言や数値目標も掲げられた。東京開催決定前のスポーツ環境を知る立場からすれば画期的であり、調査対象者の語りとしてもリアルに示されている。これらの変化が大会終了とともに収束するのではなく、その影響が国内に浸透していくことが必要である。

スポーツは、トップアスリートだけのものではなく、グラスルーツレベルから幅広く人々の生活に位置付けられるものである。そのために何が必要か、今回の調査対象となった皆さまから貴重な道標をいただいた。それは、できることに目を向けて創意工夫を重ねるというチャレンジマインドである。この考え方は「その人にあったスポーツ（アダプテッド・フィジカルアクティビティ、アダプテッド・スポーツ）」と一致する。しかし、スポーツのメリットを享受できていない多くの障害のある人が存在することを忘れてはいけない。加えて、本調査では知的障害や精神障害のある人を対象としたインタビューには着手できていないことから、それらを踏まえた上で今回得られた知見を基に、どの時期にどのような経験や支援があれば

スポーツを日常生活に取り込むことができるのかについて、立場の異なる人々が一緒に考え、それぞれの視点で実践できることを行動に移していく、そのような社会になることを願っている。

本調査にあたり、インタビューに応じてくださった皆さま、事務局としてご支援いただいたヤマハ発動機スポーツ振興財団の皆さまに改めて感謝を申し上げます。

（齊藤まゆみ）

執筆者紹介（掲載順,〈〉執筆箇所）

藤田　紀昭〈はじめに, 第1章, 第2章, 第6章, 第7章〉
日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科　教授
日本アダプテッド体育・スポーツ学会　会長
日本パラスポーツ学会　常任理事
スポーツ庁・スポーツ審議会健康スポーツ部会委員
日本パラスポーツ協会技術委員会　副委員長
ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・
プロジェクトリーダー

河西　正博〈序章, 第4章〉
同志社大学スポーツ健康科学部　准教授
一般社団法人　日本体育・スポーツ・健康学会アダプテッド・スポーツ
科学専門領域　評議員
日本アダプテッド体育・スポーツ学会　理事
2014 アジアパラ競技大会・パラバドミントン日本代表コーチ
日本車椅子バスケットボール大学連盟元理事
ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・
プロジェクトメンバー

小淵　和也〈第3章〉
公益財団法人笹川スポーツ財団　政策ディレクター
スポーツ庁・スポーツ審議会健康スポーツ部会障害者スポーツ振興
ワーキンググループ　委員
東京都スポーツ振興審議会　委員
日本パラスポーツ協会技術委員会アドバイザー
日本パラスポーツ協会（JPSA）公認上級パラスポーツ指導員
ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・
プロジェクトメンバー

齊藤　まゆみ〈第5章，おわりに〉
筑波大学体育系　教授
日本アダプテッド体育・スポーツ学会　副会長
一般社団法人　日本体育・スポーツ・健康学会アダプテッド・スポーツ
科学専門領域　評議員
日本パラスポーツ協会科学委員
茨城県障がい者スポーツ研究会　会長
ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・
プロジェクトメンバー

附録
キャリア調査インタビュー一覧

※本文中の「識別番号」は、一覧の「通し番号」「識別記号」の番号と同じ調査対象者である

■2019 年 2020 年度

※パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載
※一般雇用には障害者雇用を含む

項目	19-A	19-B	19-C
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	1	2	3
生まれた年	1967	1978	1956
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	24	15	25
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳	陸上競技	パラアイスホッケー
競技開始年齢	27	25	25
競技レベル	国際人会出場	国際人会出場	国際人会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセン指導員 ・看護師（妻）	・義肢装具士 ・クラブメンバー	・リハセン指導員
パラスポーツ開始場所	・リハセン	・障害者スポーツセンター ・地元陸上競技場	・リハセン
パラスポーツ情報提供者	・リハセン指導員	・義肢装具士	・リハセン指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・入院時のため特に必要なし	・義肢装具士	・入院時のため特に必要なし
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・チームメンバー	・義肢装具士 ・陸上仲間 ・妻	・妻 ・仲間 ・監督・コーチ
パラスポーツ継続状況	妻やチームメンバーの介助を受け週2回程度。近くのバリアフリープールで	夕方まで仕事をし、 その後練習。帰宅は22時、23時。自宅近くの陸上競技場が拠点。車で移動。	週末早朝に長野県に出向き練習。この競技をなくしたくないという思いが強い。
支援	・勤務先・公的機関	・公的機関	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役	健常者の記録にどれだけ近づけるか。障害者スポーツの環境整備に貢献したい。	次世代の育成、競技普及にかかわりたい。指導者は目指していない。
その他 特記事項	水泳はパラリンピアンの講演をきっかけに開始した。	パラリンピック出場経験あり。地元で講演を年間40～50ほどこなしている。	意外と経済的負担が大きいので若手が育たないのではないかと考えている。パラリンピックメダリスト。

*1 子どもの時から他スポーツもしていたが、進行性の障害のためパラスポーツを競技として始めたのがこの年齢である

項目	19-D	19-E	19-F
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	4	5	6
生まれた年	1996	1976	1976
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	28
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	陸上競技	車いすフェンシング
競技開始年齢	11	40 *1	28
競技レベル	国際大会出場	国内大会上位	国際大会出場
パラスポーツ開始時の重要な他者	・母 ・母の友人 ・障害者卓球クラブ監督	・家族 ・地元パラリンピアン	・妻
パラスポーツ開始場所	・福祉会館（障害者卓球クラブ）	・発掘事業	・県総合福祉センター（車いすバスケットボールクラブ）
パラスポーツ情報提供者	・母親の友人（障害児を持つ）→母親	・メディア	・妻 ・メディア（リアル）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・母親	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・弟（同じ障害を持つ選手） ・中学卓球部顧問 ・車いす卓球の師匠 ・練習相手としての父	・妻 ・仲間 ・監督 ・トレーナー	・妻 ・練習相手（健常者）
パラスポーツ継続状況	小学校で障害児卓球クラブで卓球を始め、中高と卓球部に所属。顧問の理解やバリアフリーの体育館があったことが幸いした。弟と切磋琢磨。	公務員となり生活が安定したことが継続の要因の一つ。毎週末に練習か大会。海沿いの堤防で練習。	現在練習中心の生活。アスリート雇用と同じ条件。地元高校や近県大学で練習。
支援	・勤務先・スポンサー・公的機関	・なし	・勤務先
将来ビジョン	2020後も現役続行。引退後は講演などをしたい。経験を下の世代に伝えたい。	仕事と両立させながらどこまでできるか考えたい。競技成績が上がることが動機づけになっている。	2020でメダルを取りたい。いつ引退するかは考えていないが何らかのスポーツに関わっていたい。
その他特記事項	最初は公務員だったが、練習環境を求めてアスリート雇用に。15年に弟は死去。	普通学校教員がパラスポーツ情報を知っていたらもっと早く始められたかもしれない。	28歳で車いすバスケットボール、30歳で車いすテニス、39歳で車いすフェンシングを始めた。上位入賞できる条件を考えて競技変更。

項目	19-G	19-H	19-I
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	7	8	9
生まれた年	1969	1969	1971
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	28	36	21
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	アーチェリー	射撃	水泳
競技開始年齢	29	36	23
競技レベル	国際大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・会社の知り合い	・病院の教授	・友人（水泳） ・メディア ・後輩（PT）
パラスポーツ開始場所	・地元企業の倉庫（健常チーム）	・ゴルフ練習場	・地元スイミングクラブ（父親が所属）
パラスポーツ情報提供者	・会社の知り合い	・病院の教授	・後輩（PT）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・会社の知り合い	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・家族 ・クラブの仲間	・妻 ・病院の教授	・受傷前からの水泳仲間 ・家族
パラスポーツ継続状況	現在健常者クラブと障害者クラブ（理事・強化担当）に所属。障害者の大会ではクラスがなくなったためパラリンピックに出場できない。国際大会に帯同している。	労災のため経済基盤は安定している。受傷後ゴルフをはじめいくつか競技をしたが、16年発掘事業に参加し、射撃を始めた。射撃はかなり費用がかかる。	週に4～5日、一般のスイミングクラブで子どもたちに水泳を指導しつつ自分の練習を行っている。
支援	・なし	・なし	・なし
将来ビジョン	今後も健常、障害者両クラブに所属しアーチェリーを継続したい。	東京2020パラリンピック後どうなるか不安。日本障害者スポーツ射撃連盟が存続できるようにしたい。	東京2020パラリンピックに向けて取り組む。選手として、コーチとして今後も水泳を続けていく。
その他特記事項	国際大会チーム監督として帯同。クラス分けの厳密化によりパラリンピックでのクラスがなくなる。健常者クラブにも所属。	2018年フランスワールドカップに監督として参加。	受傷前から水泳をしており、高校総体や国体にも出場していた。

項目	20-A	20-B	20-C
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	10	11	12
生まれた年	1981	1975	1973
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	九州
調査時身分	一般ののち選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	13	0	0
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳/トライアスロン	アルペンスキー	アーチェリー
競技開始年齢	26	26	21
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・パラ水泳コーチ	・義肢装具士	・ロス五輪オリンピアン(ネロリ・フェアホール) ・療育センター職員
パラスポーツ開始場所	・フィットネスクラブ	・スキー場（チェアスキー教室）	・障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者	・メディア（インターネット）	・義肢装具士	・テレビ ・療育センター職員
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・会社のCSR ・会社の社長 ・サラ・レイナートセン選手 ・トライアスロンコース仲間	・アメリカ人コーチ	・地元アーチェリークラブの存在 ・妻
パラスポーツ継続状況	2008年～水泳、2013年～トライアスロン。2019年から会社の支援を得て、競技活動＝業務となった。競技継続には会社の理解が大きい。	2009年からアメリカを拠点として北京パラを目指している。	地元パラアーチェリークラブで活動。役職も務めている。選手雇用でないため遠征費とかは出ないが遠征時には配慮有。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役としてトライアスロンを続けていきたい。	現役の間は将来のことは考えにくい。	強化選手や代表選手を常に目指していきたい。普及と強化に関わっていきたい。
その他特記事項	13歳で障害発生以降、体育を含め一切スポーツをしなかったが自分を変えたくて3～10歳まで経験した水泳を開始。パラリンピック出場を契機に会社の理解が得られた。	子どもの頃は障害受容ができていなかった。周囲の人の歩み寄りが欲しかった。現在は競技に専念できる雇用形態である。	地元アーチェリークラブの代表。競技人口の少なさが役員継続の要因の一つ。デュアルキャリアを実践している。

項目	20-D	20-E	20-F
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	13	14	15
生まれた年	1983	1967	1970
性別	男	男	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分	自営	選手雇用	自営
障害発生年齢	0	29	16
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	車いすテニス	水泳
競技開始年齢	9	33	36
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・卓球に誘ってくれた小学校の友人 ・母親（卓球国体選手）	・福祉関係職員 ・車いすテニスクラブリーダー ・入院仲間	・障害者水泳指導者
パラスポーツ開始場所	・小学校（卓球クラブ）	・地元市内テニスコート （クラブの練習場所）	・民間スポーツ施設
パラスポーツ情報提供者	・地元体育館ポスター	・市役所 ・社協	・パラ水泳指導者
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・パラ卓球クラブチーム監督 ・卓球仲間 ・弟 ・ライナー・シュミット選手	・クラブチーム仲間 ・同じクラスのライバル選手 ・指導者	・仲間 ・妻
パラスポーツ継続状況	高校卒業後一時卓球を中断していたが22歳から再開。仕事を一旦やめ大学へ。卒業後家業の傍ら卓球を続けている。	2010年にクアードクラスに転向し、翌年から国際大会出場。パラ出場を目指して。20試合くらい転戦。現在東京パラを目指している。	現在民間スポーツ施設や障害者スポーツ施設で水泳を継続している。競技をすると気持ちの浮き沈みがあるが、意欲が下がった時には健康づくりで始めたのだからと考え、気軽に水につかる。
支援	・勤務先・スポンサー	・勤務先・公的機関	・なし
将来ビジョン	障害があってもスポーツをすることは可能なことを子どもや親に伝えていきたい。	まずは東京パラリンピック。この年で頑張っていることをアピールしたい。引退後は後継を育てたい。	太らないよう継続したい。引退ということは考える必要はない。
その他 特記事項	弟は日本パラ卓球協会の広報担当。	選手雇用、公的補助のおかげでコーチについて練習できるようになった。	パラ水泳を始める前、自ら民間スポーツ施設で様々なことをやり、その中で水泳を継続するようになった。その後、パラ水泳を知り、大会に出場するようになった。

項目	20-G	20-H	20-I
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	16	17	18
生まれた年	1993	1990	1997
性別	男	男	女
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分	その他	選手雇用	学生
障害発生年齢	0	18	14
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	中度
学校種別	普通学校→特別支援	普通学校	普通学校
現在実施競技	陸上競技	車いすバスケットボール	車いすバスケットボール
競技開始年齢	14	20	18
競技レベル	全国人会出場	国際人会出場	国際人会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	体育教師（特支）	・ネット情報 ・チームのメンバー	・特になし
パラスポーツ開始場所	・特別支援学校（中学）	・特別支援学校体育館 （クラブチーム練習）	・クラブチームの練習場
パラスポーツ情報提供者	・中学校教師	・インターネット	・小学校時代から地元にチームがあることを知っていた（大会が行われていた）。
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人（特支）	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・特別支援学校教師（陸上部コーチ） ・両親	・最初に声をかけてくれた地元チームのメンバー（尊敬している） ・競技自体の魅力 ・海外の選手からの刺激など	・チームの主将
パラスポーツ継続状況	高校までは特別支援学校で練習。その後障がい者アスリートクラブ（陸上クラブ）で月２回、 家での自主トレ（ローラー）	バスケットボールが面白くなり、地元チームの練習に加えて自分で体育館を借りて練習したりするようになった。現在、週に5日か6日練習している。地元チーム以外に県外のチーム練習にも参加している。	これまで好きだから続けていた車いすバスケットボールで、日本代表として活躍することが新たな目標として加わった。国際大会に出場して、多くの人の目に触れることで、これまで支援してもらった人たちに、自分はこれだけのことができるようになったのだと伝えることができる。感謝を伝えられる。
支援	・なし	・勤務先・公的機関	・スポンサー・公的機関
将来ビジョン	もっと速く走れるようになってパラリンピックを目指したい。	41、2歳の時にパラリンピックがあるのでそこまではトップ選手としていきたい。若い選手に日本代表はこういうものだというのを伝えたい。	将来は教員になりたいと考えている。現在、大学でも教職課程を履修している。そのため、日本代表の活動は、ある程度の期限を持って進めていきたいと考えている。クラブチームの活動は、一生涯のスポーツとして続けられる限り続けていきたい。
その他 特記事項	阻害要因は、ケガや体調不良の影響。下がった気持ちを立て直す際に大きな影響となるのは、コーチの存在。	パラリンピック開催決定後の社会的変化が影響しているといえる：仕事の形態：学校事務（嘱託・アルバイト）→保険会社へ。金銭の心配なく練習時間も確保できるようになった。県からの強化費も受けられるようになった。	車いすバスケットボールをやると、ただの障害者ではなくて、アスリートでいられる。ネガティブだった自分のイメージも変わった。障害に対する考え方、アスリートのマインドを教えてもらえた。

項目	20-J	20-K	20-L
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	19	20	21
生まれた年	1955	1980	1988
性別	男	男	男
居住地域	九州	関東	関西
調査時身分	その他	自営	選手雇用
障害発生年齢	23	24	0
障害内容	肢体不自由	視覚障害	肢体不自由
障害程度	重度	重度	軽度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	車いすテニス	柔道	パラバドミントン
競技開始年齢	26	25	21
競技レベル	国際人会出場	国際人会入賞	国際人会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセンPT ・パラ観戦ツアー	・高校の同級生	・パラバドミントン強化コーチ
パラスポーツ開始場所	・リハビリテーション病院	・高校時代の同級生と	・地元パラバドミントンクラブ
パラスポーツ情報提供者	・リハセンPT	・高校時代の同級生（恋人）	・パラバドミントン強化コーチ
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・リハセン	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・指導者	・視覚障害者柔道の先輩	・当時の強化コーチ ・同じ境遇の選手
パラスポーツ継続状況	練習時間の確保、大会の遠征費が捻出でき、比較的、日程調整が可能な非常勤の仕事を3つ掛け持ちしながら、競技に集中できる環境を整えた。	2006年に出場した初の国際大会で惨敗し、より一層練習に取り組むようになる。練習内容の変更、練習相手や環境を自らが積極的に動いて探した。同年に開催されたフェスピック大会で優勝して、2008年の北京パラリンピックに出場。	大学部活引退後にパラバドミントン日本選手権出場。準決勝敗退だったが強化選手に。大学院時代、最初の職場では練習は週に2～3回。東京パラを見据えて選手雇用に転職。現在複数拠点で練習。
支援	・なし	・勤務先	・勤務先
将来ビジョン	車いすテニスの日本代表強化に力を注ぐ。総合型地域スポーツクラブの立場から地域の障害者のスポーツ環境を整備する。	ライフワークとしては継続していく。選手として継続するかは、2021年の東京パラの状況を見て決めたい。	できる限り選手としてやっていきたい。
その他特記事項	パラリンピックを直接観戦したことで、自分も出場したいと大きな夢をもらった。車いすバスケットボールでの出場が厳しくなり、車いすテニスに転向。日本一となり、パラリンピック出場を果たす。	以前から柔道をやっており、受傷後、視覚障害者柔道を始めた。	もともとバドミントンをやっていた。途中でパラバドミントンを知り、こちらに関わるようになった。

項目	20-M
調査年度	2020
通し番号	22
生まれた年	1979
性別	男
居住地域	九州
調査時身分	その他
障害発生年齢	18
障害内容	肢体不自由
障害程度	重度
学校種別	普通学校
現在実施競技	陸上競技
競技開始年齢	25
競技レベル	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・パラ陸上仲間 （せき損センターで知り合った） ・障害者スポーツセンター職員 ・パラ陸上選手
パラスポーツ開始場所	・車いす陸上の選手らの練習場所（道路）
パラスポーツ情報提供者	・パラ陸上仲間 （せき損センターで知り合った）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・車いす陸上日本代表選手 ・弟
パラスポーツ継続状況	以前は週に6回練習していたが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で週に3～4回と減っている。アスリート雇用ではないため、練習や大会にかかる費用はすべて自費。
支援	・なし
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指す
その他特記事項	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、せき損センターで出会った車いす陸上日本代表選手から車いす陸上を見に来ないかと誘われたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。

■2021年度

※パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載
※一般雇用には障害者雇用を含む

項目	21-A	21-B	21-C
調査年度	21	21	21
識別記号	23	24	25
生まれた年	1990	1982	1985
性別	男	男	男
居住地域	東海	関西	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	選手雇用
障害発生年齢	19	17	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	ボッチャ	陸上競技	車いすラグビー
競技開始年齢※	22	20	20
レベル	国内上位	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・見学に行ったツインバスケットの選手	・PT(理学療法士) ・義肢装具士	・車いすラグビー日本代表の強化に関わっていたリハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生 ・体験会で出会った車いすラグビー日本代表 ・車いすラグビーのDVD
パラスポーツ開始場所※	・地元ボッチャクラブ(市内公共センター)	・スノーボード：山(スキー場) ・陸上競技：N市競技場(クラブメンバーとして)	・リハビリテーションセンター
パラスポーツ情報提供者※	・見学に行ったツインバスケットの選手 ・地元ボッチャクラブ	・スノーボード雑誌　・PT(理学療法士) ・専門学校の先生　・義肢装具士	・リハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・両親	・一緒に練習しているレベルが同じくらいの学生達 ・陸上部指導者(大学・大学院の指導教員) ・専門学校の先生	・家族
パラスポーツ継続状況	・週末の土日に練習1回4時間程度している。(場所は自宅、近隣の福祉法人が持つ体育館。廃校になった学校の体育館)大会にはコロナがなければ年に2～3回出ている。 ・会社にはボッチャをやることを了解してもらっており、ボッチャの活動も勤務時間とみなしてもらっている。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行っている。 ・継続していく上で大変なのは練習場所の確保(練習場所がない・少ない)	・専門学校：中部地区のクラブチームで ・大学：陸上部で他の学生と一緒に練習 ・S社：午前中から午後2時までは勤務、母校の大学施設を利用して練習。その後学生とともに16時20分～練習。土日遠征も勤務扱い。遠征費等はほぼ会社がカバーしてくれていた。 ・現在：母校の大学施設で練習。(コロナ禍で)午前中練習、月・水・金は走って練習＋午後・ウェイト、火・土はウェイト練習とプール。木はプールだけ。日曜は完全休養。午後は時に講演など。	・2008年から関東の車いすラグビーチームでプレーを始め、2018年頃から西日本のチームに移籍し、2011年から現在まで日本代表選手として活動。 ・現在は週3日から5日程度、日本財団パラアリーナで関東圏のチームのメンバーと練習をすると同時に、月に1回程度所属チームの練習に参加。
支援	・なし	・勤務先、スポンサー、公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・ボッチャはこれからも上を目指して続けていく。 ・パリのパラリンピックに出場したい。	・会社に所属しつつ指導者として後進の指導にあたれるといいと考えている。 ・ロサンゼルスパラリンピックでゴルフが入るのでそれを目指したい。	「パラリンピックで金メダルを取りたい」という思いが強いので、2024年のパリ大会、2028年のロサンゼルス大会になるかわからないが、そこに対する情熱は常に持っている。
その他 特記事項	・受傷前スポーツをやっていたことは、スポーツ(ボッチャ)を始める際にはプラスに働いていると思う。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行って「すごーい」と、子どもたちに言われるととても嬉しい。ボッチャを通して外(他人)との関わりが持てることがとても大きい。 ・両親も年齢を重ねてきたのでどこかで介助者をチェンジしなくてはいけない。最近では、ヘルパーにお願いしている。	・パラリンピック国内開催により、企業の注目も上がり、プロとしての活動が可能になっている。 ・今後はプロの指導者としての活動の在り方を模索。 ・同様の障害を持っている子どもたちには、体育の授業で競技用義足が使える環境を整備すべきという意見が聞かれた。 ・パラスポーツ普及には、パラリンピック終了後に引退する金メダリストがいれば、テレビ出演等露出が多くなり、普及につながるという意見を述べられた。	・競技開始当初、十分な支援を受けられていなかったが、競技実績を積み上げると同時に、東京パラリンピック招致の影響等により、金銭的な支援や練習環境は充実してきている。 ・強化指定選手への支援は充実してきているが、若手への支援が十分ではなく、用具や金銭的な支援が必要である。 ・引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動を続けていきたいと考えている。

項目	21-D	21-E	21-F
調査年度	21	21	21
識別記号	26	27	28
生まれた年	1980	1991	1979
性別	男	男	男
居住地域	甲信越	関東	関西
調査時身分	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	18	15	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	陸上競技	陸上競技	車いすバスケットボール・パラクライミング
競技開始年齢※	19	16	13
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・主治医 ・義肢装具士 ・コーチ ・看護師（のちの妻）	・入院先の義肢装具士 ・高校の体育の教員	・母親 ・子どもたち対象の視覚障害のクライミング体験を実施した時に、講師として招聘した視覚障害クラス日本代表（パラクライミング）
パラスポーツ開始場所※	・大学の陸上部	・高校（陸上部）	・市民体育館
パラスポーツ情報提供者※	・主治医 ・義肢装具士	・義肢装具士 ・入院先のリハビリに携わっていた先生方	・母親
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・母親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・経済的基盤となるスポンサー（所属企業）等の出現	・同じ義足の陸上選手　・障害のない仲間たち ・現在の所属先　・義足メーカー	・大学時代の同級生（現：選手兼ヘッドコーチ） ・子ども対象の視覚障害のクライミング体験をした際、講師だった視覚障害クラス日本代表選手 ・応援してくれる人,応援したい沢山のクライマー
パラスポーツ継続状況	・場所：大学でやっていた時は毎日練習したい時に大学施設が使えた。地元に帰ってきてからはそれが難しい。 ・指導者：競技を行う時期によって義肢装具士が重要な他者であった時期もあるし、その後は競技のコーチの重要性が高まってきた。競技コーチは2004年以降指導してもらっている。	・2016年から現在の所属へ転職し、所属先の支援を受けながら競技を継続。 ・現在は、週5日ほど師事しているコーチが主宰しているクラブで、障害のない選手とともに練習、トレーニングを行っている。	・車いすバスケットボールは週に2～3日程度、パラクライミングは週3日程度練習をしている。 ・仕事と競技を両立しており、パラクライミングに関しては日本代表の活動で海外遠征の機会があり、有志の寄付等はあるものの勤務先や協会からの支援はなく、国際大会へのエントリーを増やしたいと考えているが苦慮する部分がある。
支援	・勤務先	・勤務先	・なし
将来ビジョン	・今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓きたい。指導者としても勉強をしながら、選手とともに高めていきたい。さらに、一般の人と同じ土俵でマスターズでの競技（義足側で踏み切らなければ出場できるという約束を取り付けている）を考えている。	・100mを10秒台で走る。 ・「パラ陸上選手」ではなく「陸上選手」として認められたいという思いがあり、純粋に足が速くなりたい。	・車いすバスケットボールに関しては「日本選手権で何位になる」といった目標はなく、求められるうちは続け、年を取ってからもシニアチームから声がかかれば参加したい。自分自身の「居場所」であり、楽しくバスケットボールを続けていきたい。 ・パラクライミングに関しては、2023年の世界選手権（スイス）で金メダルを取りたい。また、パラリンピックの追加種目になるため、競技人口を増やすべく国内外で普及に関わる活動をしていきたい。
その他特記事項	・急性期、リハビリ期を担当する医師がパラスポーツの知識を持っていることは非常に大きい。予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができる。 ・スポーツ継続に関して、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果がここに見られる。 ・パラスポーツ普及には、障害を持ったあとも地元でスポーツができる受け皿が必要。施設や指導者がいても仲間がいないとなかなか続かないと考えている。	・競技用義足は高価であり、これからスポーツを始める人を対象とした支援制度が必要ではないだろうか。 ・高校、大学と陸上部で競技を継続し、仲間たちが自分を特別扱いせず接してくれたことが、楽しく陸上を続けてこられた一因であった。 ・義足に関しては知識を持った医師や義肢装具士等に出会えるかどうかも重要であり、足の切断についてもスポーツに適した・適していない方法があるので、適切な医療職と出会えるかどうかも非常に重要である。	・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、特別支援学校や特別支援学級、病院等への情報提供が十分ではなく、上手くマッチングできていない印象を受ける。 ・「いいね、やってみよう」と言ってもらえるような、「否定しない大人」に出会えるかどうかが重要である。

項目	21-G	21-H	21-I
調査年度	21	21	21
識別記号	29	30	31
生まれた年	1998	1990	1966
性別	女	男	男
居住地域	関西	関東	東海
調査時身分	選手雇用	選手雇用	その他
障害発生年齢	14	21	30
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	中度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	陸上競技	陸上競技・スノーボード	柔道・陸上競技・自転車競技・水泳
競技開始年齢※	15（高校1年）	24	31
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・医師 ・同じ切断の陸上競技選手 ・両親 ・SEKAI NO OWARI	・リハビリテーションセンターPT ・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン	・公民館で柔道を教えていた先生 ・自分の子どもたち
パラスポーツ開始場所※	・地元の義足の人の陸上競技クラブ	・東京にある切断の陸上競技クラブ（都内陸上競技場）	・町の柔道場（公民館）
パラスポーツ情報提供者※	・同じ切断の陸上競技選手	・リハビリテーションセンターPT　・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン	・市役所
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・同じ義足の走り幅跳び競技者 ・ライバルの存在	・一緒に練習をしているパラリンピアン ・妻 ・所属会社	・妻 ・子ども ・使用するスポーツ施設スタッフ
パラスポーツ継続状況	・大学1年次に2016年リオパラリンピック出場 ・その後走り幅跳び専門のコーチに師事 ・高校3年生の時から企業と契約し、プロとして活動 ・21年4月からS社所属 ・練習期は午前中に練習、午後ウェイトトレーニングやプール。出社する日は週1回、午後2時半まで仕事、その後練習。 ・コロナ前だと、年間10～20試合くらい、海外遠征は年に3回くらい。多い時で4回。	・現在は競技中心の生活。 ・月・水・金・土が午前中走る練習。月・火・水・金・土に午後、ウエイトトレーニング。火曜と木曜はプール。日曜はオフ。 ・コロナ前であれば年間6～7試合、スノーボードは1試合出場。 ・現在所属の会社の理解が大きい。練習環境のサポート、社員の応援など。	・視覚障害者となったあと、柔道を再開。シドニーパラリンピックで入賞。その後、自転車や陸上競技（投擲）を実施。 ・練習場所（柔道、自転車、陸上、スポーツクラブ）について、障害を理由に拒否され続けたが、何度も通い、人間関係を構築するなど粘り強く交渉し、最終的に使わせてもらえるようになった。 ・妻が働き生活を支えてくれているので、競技に専念している。現在は、投擲専門の指導者に指導してもらっている。
支援	・勤務先、スポンサー	・勤務先	・なし
将来ビジョン	・陸上は自分の体が「あ、もう無理や」と思うまでやりたい。 ・東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終わればきっとロスこそはと考えていると思う。	・今後とも夏と冬の競技を続けていきたい。もっとレベルを上げたい。ライバル選手を超えたい。 ・引退後は子どもたちの指導・育成ということがあるかもしれないが、それをやるのにもまずは今の競技力をアップさせしっかりと結果を出すことが大切だと考えている。 ・今の会社は非常に理解があるので、スポーツを通した社会貢献を会社所属でやれるのではと今は考えている。	・105歳までにマスターズで記録を残すことが目標。その年齢まで面倒を見てくれるスポンサーも探す。 ・60歳になったら一般の大会の投擲5種に出ようと思っている。ハンマー投げはやっていないのであと5年間で練習する。105歳で健常者の大会に、アイマスクをして出る。
その他特記事項	・受傷後、非常にスムーズに競技に入ることができている。その要因として、担当医師が障害者スポーツに関する知識を持っていたこと、ロールモデルとなる同じ障害のある選手と出会い、様々なアドバイスをしてくれたこと、地元に切断者のための陸上競技クラブがあったこと、一般高校の部活動で受け入れてもらえたことなどが挙げられる。 ・競技の継続に関してはスポンサーの存在、同じ所属会社の選手の存在が非常に大きい。 ・現在23歳と若い。陸上競技はもちろんだが、切断ヴィーナスのファッションショーに出演したり、雑貨を作ったり、絵本を描いたりとマルチに活躍しているところが特徴的である。	・受傷後のリハビリ施設が国立リハビリテーションセンターだったこともあり、スポーツに関する情報が多く取れ、スポーツ開始に繋がっている。 ・競技用義足を借りることができたことも競技生活の入り口にあっては大きかった。 ・スポーツ競技の継続に関しては所属会社からの経済的な支援や競技に専念できる環境づくりに対する支援があることが大きい。 ・また、目標となる選手の存在や家族の支援があることも重要であることがわかった。	・障害を持ってからのスポーツ開始には、自治体の情報提供制度や障害者スポーツ協会の存在が影響している。情報提供に終わらずスポーツの場へのつなぎが重要であることが明らかである。 ・何より本人のやりたい気持ち、自ら動く行動力が大きく影響している。受け入れてもらえないスポーツ施設、クラブのメンバーに対しても声を荒げることなくコミュニケーションをとり、最終的に受け入れてもらえるようになっている。 ・「105歳までスポンサーをつけて一般の大会に出る」という今後のスポーツ活動の見通しはこれまでにはなく、一つのモデルになる可能性を秘めている。

項目	21-J	21-K	21-L
調査年度	21	21	21
識別記号	32	33	34
生まれた年	1959	1961	1976
性別	男	女	男
居住地域	東海	関西	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	52	0	17
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	特支→普通	普通→特支
現在実施競技	アーチェリー・フライングディスク	バドミントン	柔道・柔術・グラップリング
競技開始年齢※	55	45	16 ※同じ高校で発症前から継続
レベル	全国出場	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・医師 ・妻 ・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者	・会社の同僚（パラバドミントン日本代表選手） ・地域のバドミントンコーチ	・高校の柔道部の恩師
パラスポーツ開始場所※	・障害者スポーツ協会（体育館等）	・障害者スポーツセンター	・高校の柔道場（部活動の継続として）
パラスポーツ情報提供者※	・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者	・会社の同僚（パラバドミントン日本代表選手） ・地域のバドミントンコーチ	・盲学校
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・現在の職場の上司	・地域のバドミントンコーチ ・バラバドミントン全日本コーチ	・助言をくれた先生（視覚障害者柔道パラメダリスト） ・妻や子どもたち ・視覚障害を持つ職場の同僚の先生や生徒
パラスポーツ継続状況	・52歳で受傷後、2014年頃からフライングディスクとアーチェリーを始める。 ・初級スポーツ指導員とフライングディスク指導員の資格も同時期に取得。 ・全国障害者スポーツ大会（2014年長崎・2015年和歌山）に出場。 ・2017年に2度目の事故にあい、その後アーチェリーを本格的に実施。 ・現在、火、水、土、日は競技に専念できている。 ・東京パラリンピック開催により指導する場を多く持つことができている。	・バドミントンを始めた頃から、地元のコーチが熱心に指導してくれたことで、バドミントンが楽しく、上達も早かった。 ・車いすでバドミントンを行う選手は少なく、競技を始めてから1年で国際大会に出場した。同じクラスの海外選手の存在、圧倒的な強さに刺激を受け、もっと強くなりたいと練習を重ね、強化合宿などで全日本コーチから指導を受けた。バドミントンがパラリンピック正式競技に決定したあと（5～6年前）、アスリート雇用となった。 ・昨年、アスリート雇用は終了したが、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。	・高校入学後に始めた柔道だが、視力低下後、自分を取り巻く環境が変化していく中でも、視覚障害者柔道は、組めばこれまでと同様に柔道ができた。周囲が視覚障害であることを忘れるくらい普通に接してくれたことで、自己肯定でき柔道が支えとなった。 ・視覚障害者柔道は、パラ4大会（アテネ～リオ）出場、リオ大会でメダルを獲得して引退。 ・現在は、後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・自分でアーチェリーやフライングディスクを続け、パラリンピックを目指すと同時に、競技を広く普及していきたい。 ・アーチェリーやボッチャ、フライングディスクも障害があってもなくてもすることができる。教室等を通じて障害のある人とない人の壁がなくなっていけばいいと考えている。若い人たちにそうしたことを伝えていきたい。	・地元の次世代アスリートの育成を行いながら、練習を継続していく予定。 ・スポーツを始める際には、まずはやる気が必要。指導者も体験に来た人をやる気にさせることが重要。バドミントンは、体育館の予約が取れれば練習が出来る。また、一緒にバドミントンを行う仲間がいると継続に繋がる。	・後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
その他特記事項	・野球で培った地肩の強さや以前に経験した射撃の訓練等が現在のスポーツ活動にも好影響を与えている。（幼稚園～高校まで野球。高校卒業後～27歳まで自衛隊に。27歳以降も野球はやっていた。） ・事故で受傷後、手術等を何度も繰り返している。社会復帰していくために必要な条件としての体力向上のためにスポーツを始めた。 ・現在、会社で障害者スポーツを実施し、普及活動をすることを業務として認められている為、競技を存分に行うことが出来ている。	・中学校でソフトボール部に所属したが、卒業後は44歳までスポーツをする機会に恵まれなかった。 ・バドミントンを始めるにあたって影響を与えたものとして、パラバドミントンの日本代表選手、地域のバドミントンコーチ、障害者スポーツセンターの存在がある。 ・国際大会での海外の同じクラスの選手との出会い、全日本コーチから指導を受けたこと、継続的な地域コーチのサポートが競技レベルの向上や意識に影響した。	・発症前から柔道の楽しさを知っていたため、発症後でも楽しく取り組むことができた。 ・視覚障害者柔道は組めば障害の有無にかかわらず取り組める競技のため、発症後、出来ないことが増えていく環境下において、心の拠り所となり、自己肯定に繋がった。 ・自己受容はできていないが、柔道を通して、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになった。

項目	21-M	21-N	21-O
調査年度	21	21	21
識別記号	35	36	37
生まれた年	1981	1981	1980
性別	男	男	男
居住地域	関西	東海	関東
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	26	32	16
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	スノーボード	スノーボード	スノーボード
競技開始年齢※	23(障害発生前から同一競技を実施)	20(障害発生前から同一競技を実施)	21
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・インターネット	・大腿義足の友人スキーヤー ・義肢装具士 ・会社の社長	・アルバイト勤務先の社長と弟 ・ジャンプ台をされいに飛んでいた名前を知らない選手
パラスポーツ開始場所※	・スキー場	・元々のホームゲレンデ	・スキー場
パラスポーツ情報提供者※	・インターネット	・大腿義足の友人スキーヤー ・義肢装具士	・当時のアルバイト先の社長
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・職場の理解 ・家族(妻) ・憧れの存在(同じ日本代表チーム)	・妻 ・会社の社長 ・代表チーム(コーチ、チームメイト)	・同年代の義足の日本代表チームメイト(憧れの存在) ・海外の有名選手
パラスポーツ継続状況	・教師をしているため基本仕事が中心。冬場は仕事終わりに近くのゲレンデに行ってナイターで練習をする。夏場は週末などに芝の練習場や人工雪の練習場に行って練習をする。今年はヘルニアのため夏場はジムで筋力トレーニング中心。 ・公立学校教員ということもあり、他の選手のように海外遠征に多くはできない。基本的には有休を使う。事前に計画を立て、多くの先生方に配慮していただいている。管理職も理解がある。年間10日から2週間くらいの海外遠征が2～3回。コロナの影響で、帰国後隔離が入るが特別休暇等の扱い。 ・国内の合宿も同じくらいの日数を使うが、自分は週末だけの参加。海外遠征で2大会くらいに出場しポイントを取ってくる。	・事故後(32歳)、自分は義足になると思い、何ができるかと考え「スノーボード」だと思った。スノーボードは小5から、競技は大学2年からやっていた。 ・退院後も1か月の自宅療養のあと、1日30～40キロのサイクリングに挑戦するなど、アクティブな療養期間を過ごす。 ・週1回室内のハーフパイプ(3時間)、週3～4回人工芝のジャンプ練習場(30～40分)、週2回ジム、これからは雪の上や遠征が増える。 ・指定強化選手で、アスリート助成を受けている。会社の理解もあり、アスリート雇用として競技に専念できる。	・現在は、スノーボードクロスの日本代表強化指定選手として活動を続ける。 ・日本の雪は柔らかく、コースを作っても溶けてしまうことから、スノーボードクロスの常設コースは存在しない。そのため、国内で練習するにあたっては、大会用に臨時で設置されるコースの情報を集めて、大会開催の前後の期間で練習する形式で国内のコースを転々とする。一方で、海外では常設コースがあるため、スキー場で利用料を支払えば練習が可能である。
支援	スポンサー・公的機関	・勤務先、公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・日本代表チームに入っているが、その中でも勝っていかないとパラリンピックには出られない。2021年12月まで争って残り1枠を取りたい。 ・腰のヘルニアのこともあり、北京パラリンピックを区切りにしたいとは思っているが、今悩んでいる。 ・自分の思った通りの結果が出ればいいが多分難しいので、そうなるとその次もという考えもある。 ・スノーボードは死ぬまでやる。指導者は求められればやると思う。	・当分引退は考えていない。 ・元プロスノーボーダーなので、ライセンスの再取得を目指している。	・2022年の北京大会、2026年のイタリアのミラノ/コルティナ・ダンペッツォ大会まではスノーボードで、それ以降は障害者ゴルフをしていくことで所属先企業と話をしている。 ・スノーボードを引退していた時期に、妻と共通の趣味であるゴルフを始めた。
その他 特記事項	・障害を持つ前からスノーボードをやっており、受傷が競技継続に大きな障害とならなかったことが同一競技を継続できた要因。障害を持つことでそれまでの生活や競技生活が分断されるということがないという、これまでにはなかったキャリアパターン。 ・公務員をしながら冬季競技をトップクラスで継続するのは相当大変なことだと考えられるが、職場の理解と支援が大きく、可能にしている。 ・日本代表チームの人間関係が非常によく、お互いを刺激しあって伸びていっている雰囲気があり、これが競技継続の大きな要因。 ・2020パラリンピック東京大会決定後、アスリート助成等の制度ができ、経済的な支援も受けられるようになったことも継続の要因。	・事故で切断後すぐに義足で何ができるかを考え、もともとしていたスノーボードならできると思った。当時パラリンピックの正式種目に採用されたことで、パラリンピックに出るという目標ができた。 ・友人に同じ大腿義足のスキー選手がいたことで、義足で生活すること、スポーツをすることに対する不安を感じなかった。 ・東京パラリンピック開催決定後の各種助成制度がスポーツ継続には好影響である。	・スノーボードを始める・継続するきっかけも、自分が目にしたジャンプが格好良くて感動し、それを自分でやってみたいという思いで無我夢中で練習して、できるようになっている。 ・国内でスノーボードが競技として認められず一度は競技から引退するが、10年後に競技として認められたことで、現役復帰。 ・2019年より所属先企業がアスリート活動を全面的に支援してくれることで、国内に存在しない常設コースを海外遠征で回ることが可能となった。

項目	21-P	21-Q
調査年度	21	21
識別記号	38	39
生まれた年	1985	1982
性別	女	女
居住地域	関西	関西
調査時身分	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	18
障害内容	視覚	肢体
障害程度	重度	中度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	水泳	シッティングバレーボール
競技開始年齢※	2（パラ競技としては19）	19
レベル	国際出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・視覚障害のある子どもの保護者 ・地元の障害者水泳のクラブのチームメイトとコーチ	・障害者スポーツセンターの指導員 ・母親 ・一緒に練習するクラブの仲間
パラスポーツ開始場所※	・地元の障害者水泳のクラブ	・障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者※	・ボランティア先の同じ障害の子どもの母親	・広報誌 ・障害者スポーツセンターの指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・地元の障害者水泳のクラブの存在（専門のコーチの指導が受けられる）	・日本代表監督 ・両親や家族
パラスポーツ継続状況	・競技を始めた頃は地元Bクラブのみ週3日程度練習していた。北京パラリンピック出場決定後、練習量を増やすために地元クラブと並行し、民間のスイミングスクールの選手コースで練習をするようになった。現在も同環境で週4～5日程度練習している。 ・Bクラブの存在がとても大きい、コーチは、個々の障害に合わせて一人ひとりの能力をどのようにすれば引き出せるかということを考えて指導してくれた。 ・大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初フルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中の半日勤務、午後は水泳に関する活動に充てられるようになった。また、競技に関する経費に一ついて、給与とは別にすべて会社の負担。	・通い始めたシッティングバレーボールクラブでは、日本代表選手が一緒に練習をしていた。同じ年代の仲間もいたことで楽しく続けることができた。 ・障害者スポーツ指導員から専門的な指導を受けたこと、バレーボールの経験があったことから、シッティングバレーボールを始めて1年余りで日本代表に選出。その後、日本代表監督からの指導を受け、2008北京、2012ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場。 ・アスリート雇用ではなかったため、遠征費や合宿の費用は自費だったが、2008年の北京大会後からは少しずつ自己負担が減っていった。2019年に引退し、アシスタントコーチとして選手を支えている。
支援	・勤務先	・公的機関
将来ビジョン	・以前は「パラリンピックを目指さなければいけない」と思っていたが、最近は自己ベストを出したいという意識が強くなってきている。中学校・高校時代の純粋に水泳が楽しかった当時を思い出して、タイムにこだわっていきたいと考えている。 ・「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものが好きなので、一度原点に立ち返って楽しんでいきたい。 ・また、指導者に以前から興味を持っており、競技と並行してまずはお手伝いのような形で関わっていけたら良いと考えている。	・2019年からアシスタントコーチとして関わっている。シッティングバレーボールがメダルを獲得し、結果を残すようになれば認知度も上がり、スポンサーなどからの支援も受けられる。 ・現在、コーチなどサポート体制は整ってきているため、練習する機会を増やしていけば、もっと強くなると思う。
その他特記事項	・親が障害と向き合って、自分の子どもの障害はどのようなものなのかについて、もう少し調べてほしかったと感じている。 ・定期的に検査で病院に通っていたが、自分が障害者手帳を取得できる事を教えてもらえなかった。障害者手帳を取得できることを知ったのは、大学受験の相談時。通っていた病院の医師や視能訓練士がもう少し早く対応をしてくれていたら良かったと感じている。 ・自分と同じような障害のある人々がスポーツを始めるにあたっては、弱視のような見えづらい障害に対する、学校関係者、医療関係者や周囲の人々の理解が重要であると思う。	・スポーツを始める際には、スポーツ指導員やリハビリ現場の関係者などが様々な障害者スポーツを知っていること、声をかけることが重要。 ・一般のスポーツセンターなどに障害者スポーツの一覧が記載されている冊子などがあれば知るきっかけになると思う。もっと広く、シッティングバレーボールを知ってもらう機会を作っていく必要がある。

※1 一般雇用には障害者雇用を含む
※2 パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載

■2022 年度

項目	22-A	22-B	22-C
調査年度	22	22	22
識別記号	40	41	42
生まれた年	1990	1991	1962
性別	女	女	女
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	0	26	31
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	特支	普通	普通
現在実施競技	柔道	陸上競技	サウンドテーブルテニス
競技開始年齢 ※2	15	26	30代半ば
レベル	国際入賞	国際入賞	地域
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・高等部体育教師 ・盲学校教師（視覚障害の柔道家、柔道部の指導者）	同じ障害の女性選手二人、義足の陸上競技クラブのメンバー	・隣県のスポーツ指導員
パラスポーツ開始場所 ※2	・視覚特別支援学校（高等部）	・市の総合運動公園の陸上競技場	・地元の視覚障害者用図書館
パラスポーツ情報提供者 ※2	・弟	・リハビリ時の主治医	・視覚障害当事者のサークル活動をしている中で
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	・両親 ・本人	-
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・全日本視覚障害者柔道連盟に関わっている先生	・クラブのチームメイト	・特になし
パラスポーツ継続状況	・ 2013年専攻科卒業後、フリー（あん摩マッサージ指圧師）で柔道を続ける。その後アスリート雇用され、柔道に専念。 ・2大会続けてパラ出場を逃し、環境の変化が必要と思い2016年から4年間をS県の道場にて過ごした。 ・ 東京2020終了後、地元に戻り、アスリート雇用され現在に至る。	・ 現在、仕事の後、週に5～6日練習。 ・ 現在コーチの指導を受けず、自分で練習。 ・ 試合数は2022年度になって増加。神戸でパラ陸上の世界選手権があること、陸連とパラ陸連の連携が大きな要因。	・当初は、隣県のスポーツ指導員が月に1回指導に来てくれていた。その後、地元の大学卓球部の学生等と活動を継続。 ・ 2012年の全国障害者スポーツ大会に出場。 ・ 東海ブロック大会に毎年出場し、それ以外にも他府県で行われる交流大会にも参加。
支援	・勤務先	・公的機関	・なし
将来ビジョン	・競技を継続し、視覚障害者柔道の認知度を高めたい。 ・パラリンピック出場は通過点、生涯現役でいきたい。J1（全盲クラス）の指導者になりたい。	・ 直近の目標はパリパラリンピックに出ること。 ・ 競技は年齢が40代になるまで続けたい。 ・競技をしつつ若い選手たちには情報提供したりしてサポートもしていきたい。	・ 可能な限りSTTに関わっていきたい。 ・ 指導者が周りにいないので、自分がプレーをするだけでなく、指導もしている。教えることも非常に楽しく、続けていきたい。
その他特記事項	・ 先天性の視覚障害者にとって、スポーツと出会う機会は限定的。数少ない機会とタイミングが合致した。 ・視覚障害柔道は、IBSAクラス分けが変更となり、J1（全盲）とJ2（弱視）のクラスとなった。J1とJ2の違いを知った上でコーチングができる指導者、トレーニングパートナー等いれば競技継続にはプラスである。	・ 就職後は一般雇用のため練習時間が取れにくかった。コロナ禍により在宅勤務となり、時間の調整がしやすくなり練習にもじっくりと取り組めるようになった。 ・ 県からの助成金を受給しているが、海外遠征や義足ソケット部の改良等の経済的負担が大きい。	・ サークルメンバーは高齢化し退会者が増加。一方で、新メンバーを探すことは難しい。弱視の人々の中には「見えていること」をやりたいと考える人もいる。 ・ 競技を通じていろいろな場所へ行き、いろいろな人と出会うことで世界が広がり、楽しい。

項目	22-D	22-E	22-F
調査年度	22	22	22
識別記号	43	44	45
生まれた年	1972	1977	1979
性別	男	女	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	12	5	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	車いすテニス	水泳	卓球
競技開始年齢 ※2	13	25	32
レベル	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・市のテニス協会の人たち	・ 職場を訪問に来た車いすユーザー(多様な情報を持っていた)	・部活動の生徒
パラスポーツ開始場所 ※2	・居住地近くの勤労福祉体育館	・ 車いすテニス:Y市の体育館	・勤務校の体育館
パラスポーツ情報提供者 ※2	・両親(車いすバスケ) ・市のテニス協会の人たち	・車いすテニス、セーリング:Nさん ・ダイビング:短大時代の友人 ・水泳:バリアフリーツアーセンター、県の障害者スポーツの関係者	
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・親(運転免許取得前) ・本人(運転免許取得後)	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・日本人Mコーチ ・カナダ人Hコーチ ・ドイツ人Hトレーナー ・当時の職場の仲間 ・家族	・ ダイビング:伊豆のインストラクター、ダイビング仲間(医療関係者や福祉関係者がいた)、奄美大島のダイビングクラブのスタッフ ・ 水泳:スイミングスクールのコーチ ・クリニック(アスリート外来)のドクター	・車いす卓球選手の先輩 ・通っている卓球クラブのコーチ
パラスポーツ継続状況	・ 大学4年時に国内トップになる。就職2年目にアトランタパラリンピックに出場。99年に転職し、選手雇用となり、競技に集中、2004年のパラリンピックを目標とした。 ・ 現在は午前中テニスのトレーニング、午後はテニスや、講演等をしている。	・パート半日(午後)勤務。午前中は自宅で家事をしたり、ヨガマットを使って筋力トレーニング。 ・ 水泳は現在、週に1回市のプールで練習。他の日は陸上での筋力トレーニングなどを実施。 ・ ダイビングは奄美大島を拠点として継続。一人で移動、ダイビングクラブのスタッフ等に支えられている。	・ 大会等で、他の車いす選手に練習等の刺激を受ける。自らの行動で環境は変えられると考え、居住地の障害福祉課に連絡し、地域の一般の卓球クラブを紹介してもらった。 ・週1回、マンツーマンレッスンを受けるうちに結果が残せるようになってきた。
支援	・勤務先、スポンサー	・なし	・公的機関
将来ビジョン	・ 選手としてプレーは続けたい。 ・ 車いすテニスをやってみたい人へ、入り口の部分を支援したい。 ・ パラ出場経験を活かして、パラリンピックを目指している人の支援もしたい。 ・ 大会運営、大会の立ち上げ。 ・ コーチにも関心があり。(一般のテニス指導者の資格も取得。)	・ 2023年度に実施される鹿児島大会までは泳ごうと決めている。 ・ ジャパンパラ水泳大会は自分の今のレベルでは難しいが、生涯スポーツの目標として頑張りたい。 ・ ダイビングは旅行の一環で継続して楽しみたい。	・ 2024年のパリ、2028年のロサンゼルスへの出場を目指す。 ・ 2028年以降も家族や職場の理解が得られれば、可能な範囲で出場し、生涯スポーツとして続けたい。
その他特記事項	・ 中学入学前に脚を切断、その後、親からの紹介もあり、中学に入って車いすバスケに取り組む。その仲間たちと車いすテニスの講習を受けたことから、車いすテニスを始めた。 ・ 国際的にトップクラスになれたのは、地道なトレーニングや人々のサポート、自分自身の成長等によりステップアップしてきた結果と思う。	・水中は車いすに拘束されることもなく、自由に動けることに魅力を感じた。 ・ 体調や肩の調子が悪くなったこともあり、仕事を一旦やめ、腱板を手術。地元開催の全国障害者スポーツ大会に備えたが、コロナ禍により中止。気持ちの区切りをつけるために鹿児島大会までは頑張る。	・ 受傷後、勤務先の部活動指導をきっかけに受傷前に行っていた卓球を再開した。 ・ 障害を理解して受け入れてくれた地域の卓球クラブ、自ら車いすに乗り、パラ卓球の特性を理解して指導に当たった卓球クラブのコーチの存在が、大きな支えになった。

項目	22-G	22-H	22-I
調査年度	22	22	22
識別記号	46	47	48
生まれた年	1997	1990	1999
性別	女	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	14	4
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通→特支	普通→特支
現在実施競技	ボッチャ	ゴールボール	ボッチャ
競技開始年齢 ※2	18	18	7
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・練習見学をした際に輝いて見えたE選手など練習参観していた人、およびE選手の父、異動サポート等支援してくれる母親および情報提供してくれるPT	・学校の先輩と友人 ・盲学校ゴールボール部顧問教諭	・当事者団体の年上のお兄さんたち
パラスポーツ開始場所 ※2	・隣県の障害者スポーツセンター	・盲学校	・市の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者 ※2	・ PT	・盲学校の先輩	・県内のボッチャ協会
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・母		・両親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・複数のボッチャの県内選手 ・コーチ（上記選手の父） ・母親	・ 学生時代は部活動の顧問教諭 ・ 就職後は県の教育委員会のスポーツ課の方、特別支援学校の先生、元同じ職場の男性看護師、職場の方々	・家族 ・会社 ・コーチ
パラスポーツ継続状況	・ 入院中、県ボッチャ協会の練習会に参加したことがきっかけで退院後、県協会の練習会や選手の主催する練習会に参加。 ・ 翌年、県協会の合宿に参加。一人の女性選手と出会い代表の話や海外の話を聞き、刺激され、ボッチャにはまった。2016年にE選手が所属しているチームに入り、練習している。 ・ 今はボッチャが自分のすべて。	・ 2013年まではグランドソフトボールもプレー、その後ゴールボール1本に。 ・週3～4日練習、それ以外にウエイトトレーニング。職場近くの体育館、障害者専用体育館、盲学校等で練習。週末は代表合宿等に参加。 ・ 2019年まで日本代表候補、その後代表落ちし、東京パラには出場できなかった。	・ 県内にボッチャ協会があり、定期的に練習。 ・ 経済的に厳しいところがあるが、家族や日本協会からのお金、県からの強化選手補助金、「応援する会」からの援助、勤務先の援助などがあり、賄うことができている。
支援	・公的機関	・公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・ 現在、ボッチャのプレークラスが変わるかもしれないという状況なのでまず気持ちを整理して、自分に厳しくして日本選手権に出て代表選手になりたいと思っている。	・ 当面の目標は、パリパラリンピックに出場すること。 ・ パリの先はあまり考えていないができるだけ長くプレーを続けたいと考えている。	・ パリパラリンピックを目指す。そこで「金」をとりたい。個人戦でも頑張りたい。 ・ パリの後のことまでは今は考えられない。
その他特記事項	・ ボッチャ継続の内的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることのうれしさ→試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識→自分の身体状況を自己研究・自己分析することによる可能性の見出しとパフォーマンスに対する向上心と支援者への恩返しと変化している。	・障害発生前のスポーツ経験（小学校で野球、中学校でバレーボール）が、同じボール球技であるグランドソフトボールやゴールボールにプラスに働いている。 ・ 2012年に地元開催の大会があり、就職の時はこの大会出場に配慮してくれるところを探し、現在の職場に就職した。	・ 小学2年時にボッチャ体験機会があり、面白いかもと興味を持つ。障害状況より、家族のサポートがなければ続けることはできなかった。 ・障害の進行から途中でクラスを変わらざるを得なかったが、ロールモデルとなる選手がいたことや、周りの支援のおかげでボッチャを継続するようになった。

項目	22-J	22-K
調査年度	22	22
識別記号	49	50
生まれた年	1982	1986
性別	男	女
居住地域	東海	関東
調査時身分　※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	中度	重度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	パラテコンドー	バドミントン
競技開始年齢　※2	36	23
レベル	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※2	・道場の先生	・兄、医師、車いすバドミントンK氏
パラスポーツ開始場所　※2	・地元のテコンドー道場	・都の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者　※2		・医師 ・障害者スポーツ指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※2	・本人	ー
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・道場の先生、理学療法士	・バドミントン仲間、地域のバドミントンコーチ、家族
パラスポーツ継続状況	・ 道場の先生の指導で、少しずつ上達。強化指定選手を目指す。全日本選手権で成績を残したい。 ・ 現在は、週に2回、2～3時間程度練習 ・ 今年度から強化指定選手。強化合宿が2・3か月に1度ある。国内大会は年に2回、国際大会は今年度3大会ほど出場予定。	・バドミントンが東京2020パラリンピックで正式競技に決定し、パラリンピック出場を目標に練習した。 ・2018年に転職し、アスリート雇用となる。午前中は勤務、午後はコーチ付きで練習を行う。
支援	・公的機関	・勤務先
将来ビジョン	・ 国内大会優勝、国際大会では入賞を目指していきたい。 ・ パラテコンドーを普及させたい。	・企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行っていく予定。 ・バドミントンは今後も継続。
その他特記事項	・ 妻が家事すべてを引き受けてくれており、競技継続上でとても大きな支えとなっている。 ・ 国際大会に出場した際に、他国の選手を見ていると、競技以外の場面でもとても楽しそうに過ごしていて、「本当に好きなことをやっているんだな」と感じさせられ、自分が競技を続ける上で刺激をもらっている。	・子どもの頃からスポーツを含め何にでも挑戦できる環境があったことが、その後のスポーツ継続に影響した。 ・障害者スポーツセンターの存在と職員の活動がパラスポーツをするきっかけと継続につながっている。 ・東京パラ開催決定後、アスリート助成/雇用などの制度ができ、経済的な支援、練習環境などが整った。

※1　調査時の雇用形態を示している過去に選手雇用があった場合も含む
※2　現在を含めパラスポーツとして主として取り組んできたもので、現在実施している競技と異なる場合もある

■2023 年度

項目	23-A	23-B	23-C
調査年度	23	23	23
識別記号	51	52	53
生まれた年	1994	1995	1990
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	四国
調査時身分　※1	般雇用	般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	13	19
障害内容	肢体	視覚	視覚
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A5	B6	B3
主実施競技　※2	パラ陸上競技	ゴールボール	柔道
パラスポーツ開始年齢　※3	大学2年生	14	大学3年生
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	中学と高校ハンドボール部顧問教師 大学女子ハンドボール部監督 大学陸上競技部監督	I先生（当時男子ゴールボール日本代表監督）、E さん（当時女子ゴールボール代表監督）	町道場の先生 ゴールボールの指導者（→柔道関係者につないだ）
パラスポーツ開始場所　※3	大学の陸上競技場	H盲学校	町道場
パラスポーツ情報提供者　※3	ハンドボール部教師 大学の障害者スポーツ専門教員	I先生（当時男子ゴールボール日本代表監督）	ゴールボールの指導者
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3	自ら		
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	・なし	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	大学陸上部の本人担当コーチ	T先生（T大学附属視覚特別支援学校高等部） A選手（ゴールボール女子選手）	コーチ
パラスポーツ継続状況	担当コーチが様々な指導やケアをしてくれた。陸上部のメンバーもウォーミングアップの仕方から、試合参加方法のイロハまで教えてくれた。国際大会でメダル獲得後スランプ気味であったが現在はパリパラリンピックを目指している。	教員免許をとりたかったので、ゴールボールをしながら通えるということでR大学に進学。練習場所は国リハと附属、大学のトレジムも使った。 東京大会後、ゴールボールの代表を引退し、所属先A社からはパラを目指さないのであれば、選手としての雇用はできないと言われ、アスリート雇用から一般就労になった。	A社では半日勤務で会社が契約しているコーチが所属する高校で週5日程度練習。 A社に1年半所属後結婚を機に現居住地に転居し、B社に転職、地元の高校および大学が練習拠点。 B社は単年契約で、東京パラ後の雇用継続に不安があったため、C社に転職し、前職と同様の練習環境で競技を継続。
支援			勤務先
将来ビジョン	パリパラリンピックで有終の美を飾りたいと考えている。 2023年度で現在の仕事の任期が切れるため、その後の身の振り方を現在、監督とも相談している。 将来的には何らかの形でパラスポーツに関わり、普及などに関わりたいと考えている。	今は2つ目の競技として、ブラインドサッカーにチャレンジしている。 視覚障害児教育があったから、今、自分があるという思いがあるので、視覚障害児教育に何らかの形で携わりたい。	2024年のパリパラリンピック出場枠の獲得が当面の目標、パラリンピック後は一度休憩して、またやりたいと思えば復帰を、もう満足していたら現役を引退するかもしれない。 C社は現役引退後も所属可能であり、セカンドキャリアとして社業に専念するか、所属しながら柔道に関わる活動をするかは、まだ決めていない。
その他特記事項	先天的な障害がありながらハンドボールという障害のない人のスポーツでトップクラスの選手となり、そこからパラスポーツのトップ選手になるという稀有な選手と言える。	小5からアイスホッケー、中学の部活は陸上部だが並行してやっていた。見えなくなってできないことが増える中、盲学校で「スポーツができる」と感じたことが大きい。 ゴールボールで「体を張る」動きなどは、アイスホッケーの経験が生かされている。陸上部の厳しい練習経験はきついことへの慣れや基礎体力の向上につながっていると思う。東京パラリンピックの後、ブラインドサッカーを始めた。	小学校5年生から柔道を始め、高校時代はインターハイに出場。障害受傷後、受け入れてもらえる道場を探すことが難しかったが、受け入れてもらった道場の先生に理解があり、スムーズに練習に参加できた。

※3　パラスポーツとして始めた最初のスポーツに関して示している。
※4　先天的障害者の場合は「なし」としている

項目	23-D	23-E	23-F
調査年度	23	23	23
識別記号	54	55	56
生まれた年	1984	1996	1988
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分　※1	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	5	中学生の頃	0
障害内容	視覚	視覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通	普通
スポーツキャリアパターン	B1	B3	A3
主実施競技　※2	ゴールボール	水泳	柔道
パラスポーツ開始年齢　※3	16	19	18
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	盲学校チームメイト、盲学校コーチ	高校水泳部の上腕欠損のM選手（同級生） 妹（当時は現役の水泳選手）	同郷の大学の先輩
パラスポーツ開始場所　※3	盲学校の体育、部活動	父親が指導者をしているスイミングスクール	大学の柔道場
パラスポーツ情報提供者　※3	盲学校のT先生（部活の勧誘）	高校水泳部の上腕欠損のM選手（同級生）	同郷の大学の先輩
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	・なし	ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	チームメイト、代表選手、部活動の指導者、代表のコーチ	妹（当時は現役の水泳選手）	大学の同級生、海外の対戦相手 一緒に活動している仲間（視覚障害者） 一緒に柔道を研究している友人（視覚障害者）
パラスポーツ継続状況	大学進学後も卒業した盲学校の部活動で競技を継続。 大学1年時に日本代表合宿に参加するが、合宿を辞退し、数年間、競技からも離れた。 大学4年時にゴールボールを再開。パラリンピックを目指す。2年後の2008年、北京パラリンピック大会に出場。 大会終了後、国内の普及活動に注力するのが自分の役割と考え、引退。	パラ選手として競技を始めていきなり日本記録を出した。 2018年の春に海外遠征をして世界のトップとの差を知らされ、その後の国際大会でも勝てず、本腰をいれるようになった。 現在、週4日練習、スイムは1回、1時間半から2時間くらい、その他にウェイトトレーニングなどをしている。	中学、高校と晴眼者相手に練習し、一般の試合に出場。視覚障害者柔道を始める際も抵抗なく取り組めた。 始めた年に日本選手権で優勝。いきなり日本一になったことで葛藤が生まれ、一時期、競技から離れる。 再開後、初の国際大会では初戦敗退。アジア大会では自分だけメダルを獲得できず、メダルへの想いが強くなった。
支援		勤務先	
将来ビジョン	パラリンピックを目指した競技継続ではなく、これからゴールボールを始める人や、競技を始めて間もない人たちのサポート役として、国内大会にも出場しながら、普及面で貢献したい。	パリパラリンピックまでは今のように頑張りたい。その後のことは未定。 将来的には水泳に何らかの形で関わりたい。指導者かパラ水泳を発信できる立場になりたい。現在地元の中学校の部活指導員として指導や大会の引率をしている。	トップアスリートとしての競技力向上が見込める限り、パラリンピックは常に目指していく。 クロスカントリースキーに取り組んでいる。柔道と異なり、接触やそれに伴う怪我がないので、長く継続できると感じている。可能であれば冬季パラリンピックにも出場してみたい。
その他特記事項	競技に復帰した時は、自身がパラリンピックに出場したい、注目されたいという気持ちはなく、自分が頑張ること、関わることで周囲の人たちが幸せになってくれることが目的になっていた。その頃は、チームメイトの存在も重要であったが、体験会に参加する子供たちの存在や反応が大きな継続理由になっていた。ゴールボールとの出会いにより自分の世界が大きく広がった。	水泳一家に生まれ、幼い頃から水に親しんでいた。スイミングスクールのコーチである父親や、元選手の母親、選手の妹、母親のことを語る祖父母の影響を受け、水泳を小学校3年から本格的に始めた。障害を持つ前からのスイミングスクールを現在も拠点にできているというレアなケースである。	全盲の人にとって柔道の上達にはスキルの言語化が必要であり、自身の主観的事実を指導者の客観的事実をすり合わせてテキスト化する作業に、自らの身体を研究材料にしながら取り組んでいる。

項目	23-G	23-H	23-I
調査年度	23	23	23
識別記号	57	58	59
生まれた年	1973	1996	1988
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分　※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	8	0	0
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通	普通→特支
スポーツキャリアパターン	B6	A1	A1
主実施競技　※2	バイアスロン、クロスカントリースキー	水泳	水泳
パラスポーツ開始年齢　※3	21	9	小学校4年生
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	盲学校時代のW先生（日本障害者スキー連盟のアドバイザー）	母親（障害者スポーツに関する情報を持っていた。プールまでの送り迎えをしてくれた）	高等部から進学する盲学校のT先生
パラスポーツ開始場所　※3	T短期大学	S県障害者交流センターのプール	地元のスイミングクラブ
パラスポーツ情報提供者　※3	盲学校時代のW先生（日本障害者スキー連盟のアドバイザー）	母親	高等部から進学する盲学校のT先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3		母親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	ヘッドコーチAさん ガイドのKさん	パラ水泳選手のSさん	コーチ、タッパー
パラスポーツ継続状況	雪で滑れるトレーニング環境を求め仕事をやめ練習に集中したが費用が底をつく。H社にスキー部が設立され、障害者のノルディックスキー選手が複数所属したことで、トレーニング環境やサポート体制が整い、金銭的な負担をする必要がなくなった。	高校に入ってからは部活動で障害のない生徒と一緒に練習するようになった。自分がうまくついていけるレベルであったことも大きく、その結果タイムも伸びた。リオ大会は選手になれず、東京大会に出場。この間クラスや泳法の変更に直面した。 現在はNTCで月、火、水、金、土が練習日、朝8時半から12時～12時半まではプールにいる。昼食後、基本的にはウェイトトレーニングをしている。	就職後はフルタイムで仕事をした後、障害者スポーツセンター等で練習していた。その後転職し、当初は午後練習していたが、のちに競技に専念できるようになる。 今年からパラリンピアンやオリンピアンの指導経験のある新たなコーチに師事し、タッパーは3名ほどが協力してくれており、チーム体制でシフトを組んで練習している。このようなチームメンバーがいるので競技が継続できている。
支援	勤務先	公的機関、スポンサー	勤務先
将来ビジョン	するスポーツとしては、伴走をお願いして走っている。仕事としては、主に障害者スキー連盟の理事。ノルディックスキー副委員長として普及にも携わっている。アスリート発掘だけでなく、ガイド発掘と、スタッフを増やすことである。	現在は2024年のパリパラリンピックを目指して集中している。 その後のことまではわからないが、今後ライフイベントで子供ができるなどの大きな出来事で、水泳に100％力を注ぐことができなくなる状況になった時は、引退についてシビアに考えるかもしれない。	競技の第一線は来年のパリパラリンピックで終えたい。 その後は視覚障害の子供たちが水泳を楽しむ機会をつくると同時に、選手たちの競技環境づくりを進めていきたい。 競技引退後はフルタイムで働きながら障害者の雇用促進に関わりたい。
その他特記事項	弱視となって盲学校に転校した後も、要所要所で重要な他者との出会いがあり、長野パラリンピックの開催が決定したことで、バイアスロンという新たな競技環境へと進んでいった。さらに企業がパラアスリートをバックアップする体制ができたことで、金銭的な負担を気にすることなく競技に専念することができた。 引退後は結婚、出産を経て、子育てと共に日本障害者スキー連盟で裾野を広げる役割を担っている。	現在企業で週半日から1日ではあるが、会社で他の社員と一緒に働いている。自分の気に入ったブランドの会社なので引退した後も同じ会社で働きたいと考えている。	3歳から水泳を始めて、小学校4年生から障害者水泳の大会に出場するようになった。中学生までは地元のスイミングクラブで活動し、高校から地元を離れて他校の盲学校に進学し、水泳部で活動していた。

項目	23-J	23-K	23-L
調査年度	23	23	23
識別記号	60	61	62
生まれた年	1997	2002	1998
性別	女	男	女
居住地域	関東	関西	関東
調査時身分　※1	選手雇用	その他	選手雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通→特支
スポーツキャリアパターン	A5	A1	A2
主実施競技　※2	アルペンスキー	卓球	ゴールボール
パラスポーツ開始年齢　※3	19	小学校5年生	16
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	N大学の障害者スポーツ専門のN先生	女子日本代表選手であるA氏 パラ卓球男子日本代表のB氏	（中学校の時に卓球なども経験しているがここではゴールボールに関して） 顧問T先生 チームメイトのTさん
パラスポーツ開始場所　※3	海外遠征（2016年、ニュージーランド）	地域の卓球クラブ	T大学附属視覚特別支援学校
パラスポーツ情報提供者　※3	N大学の障害者スポーツ専門のN先生	日本代表選手であるA氏・B氏	顧問のT先生 チームメイトのTさん
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3		両親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	・なし	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	弟、全日本チームのコーチのIさん、大学の先輩でアスレティックトレーナーなどをしているKさん、日本代表チームのメンバー	両親	ゴールボール代表監督Iさん
パラスポーツ継続状況	8月～12月中旬までは海外遠征が断続的にある。1月に入るとワールドカップ。その後4月のシーズン終了までは国内と海外の合宿試合が複数回。 シーズン終了後は国内でNTCを利用してトレーニング。今は午後に2時間のリハビリ、2時間のウェイト、1時間半の有酸素系トレーニングをしている。有酸素系はバイクを漕ぐとか、インターバル、低酸素室トレーニング。	中学校入学後、平日は毎日卓球部で活動し、土日は中学校の外部コーチから紹介されたクラブで練習。 高校進学後、平日は毎日卓球部で活動し、土日は自宅で練習。 大学進学後、平日は週に1回程度大学の卓球サークル、2回程度高校時代の外部コーチと練習をし、土日は他の車椅子選手やコーチと練習。	高等部3年の時に受験で1年間部活動を休み、大学進学後は隣接するT技術大学のゴールボールサークルにて週2回程度競技を続けていた。 2016年7月のジャパンパラで注目され、その後強化指定選手となり、T地区と都内での日本代表としての2拠点練習をしていた。
支援	公的機関、スポンサー	大学	勤務先
将来ビジョン	次のイタリアミラノでのパラリンピックに集中、そのあとのことは決まっていないが、できれば37歳（ミラノの次の次の大会）までは現役でやりたい。 現在の会社は引退後も雇用してくれる可能性があるので、アスリートの人たちに会社の商品を通して貢献できることはないかと考えている。	2028年のロサンゼルスパラリンピックの出場を最終目標、その過程で、来年のパリの可能性が出てくれば、そこを目指していきたい。 大学卒業後は仕事と卓球の両立を目指しアスリート雇用は考えていない。引退後は卓球にこだわらず障害者スポーツ認知向上や環境改善に関わりたい。	T大学大学院修了後、S社に就職（正社員）し、アスリート支援の会社方針のもと、全面的なバックアップがあり、アスリートとして2024年のパリパラリンピックを目指して競技を継続。
その他 特記事項	スポーツ一家で育ち、子供の頃から様々なスポーツを経験している。中でもラグビーが専門で他のスポーツはラグビーに生かすために実施したという。 精神的不調から大きな怪我を負ったが、これもポジティブに捉え、新たな可能性を本人が感じられるようになっている点、アスリートとしての成長の途上だと言える。	小学校5年生頃からパラ卓球を始め、中学校2年生頃から国内外の大会に出場。中学・高校と卓球部と学外のクラブで活動し、自宅練習場も拠点となっている。 大学入学後は学内の卓球サークルと、パラ卓球選手との活動を並行して行っている。大学卒業後は、仕事と競技を両立しながら2028年のロサンゼルスパラリンピックを目指していきたいと考えている。	弱視という状況で育ったが、体を動かすことに対して積極的な姿勢があり、地方から都内へと自らの意思で活動の場を広げていった。 強化指定選手に選出されたことをきっかけに、様々な経済的・社会的支援を受けることができている。

項目	23-M	23-N	23-O
調査年度	23	23	23
識別記号	63	64	65
生まれた年	2001	1990	1986
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分　※1	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	中学校3年生	0
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	特支
スポーツキャリアパターン	A1	B5	A1
主実施競技　※2	ゴールボール	車いすラグビー	ゴールボール
パラスポーツ開始年齢　※3	16	高校3年生	16
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	国内上位	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	クラスメイトのSさん（現男子日本代表選手）	競技開始当時チームメイトであった、日本代表のW選手	学校の教員T先生
パラスポーツ開始場所　※3	国立障害者リハビリテーションセンター	地元の車いすラグビーチーム	高校のクラブ活動（特別支援学校体育館）
パラスポーツ情報提供者　※3	クラスメイトのSさん（現男子日本代表選手）	リハビリテーションセンターで声をかけられた選手	学校の教員T先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3		本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	なし	ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	I監督（女子代表監督） K先生（国リハ担任）	所属先企業、家族	ゴールボール日本代表選手
パラスポーツ継続状況	寄宿舎生活だったのでC体育館の使用が容易であった。朝食前後での朝練、昼休みもゴールボールの自主練習、放課後は部活や国リハで練習、授業以外の全ての空き時間はゴールボールに費やしていた。 日本選手権初出場の時から、パワーがあると代表合宿に声をかけられ、上を目指して、世界と戦っていこうと思った。	現在は週に3～4日程度チーム練習をし、それ以外の日は自宅でストレッチやトレーニング。 練習は複数チームの合同練習はパラアリーナで行っており、移動に不都合はないが、平日夜のチーム練習は行けないこともある。 国内大会は年3～4回あり、それ以外に各チーム主催のオープン大会が年3回程度実施されている。	入部して3か月で当時の日本代表と練習試合を行った。1点も取れずに負けて、日本代表の強さに衝撃を受けた。自分も代表選手のように速いボールを投げたい、強いボールを投げたいという思いが大きくなり、ゴールボールにのめりこんでいった。 継続できたのは周囲のサポートがあったから。ゴールボールがあったから、現在の仕事にも就けている。
支援	勤務先	勤務先	
将来ビジョン	H社に所属し、パラアスリートが業務と両立して世界を目指すという部署で業務と競技を両立して世界を目指す。	チームの日本選手権出場が第一目標。 個人としては強化指定選手への復帰を目指している。 何歳までプレ　するという具体的な目標はないが、生涯スポーツとして体力づくりを兼ねてラグビーを続けていきたい。	いつまで現役が続けられるかわからないが、パリパラリンピックに出場することが目標。 引退後も、現在の所属先で勤務を続け、若い選手の指導やサポート、育成に関わっていきたい。 プレーヤーとしての経験の還元などに加えて、マッサージなどで選手の身体的ケアにも貢献したい。
その他特記事項	見えないことで劣等感を抱き、スポーツとは無縁だった幼少期から、盲学校で自分以外にも見えない人がいること、見えなくても積極的に動くことができると気づいた。 ゴールボールを始めたことで、スポーツや運動が楽しいと思えるようになり、それに伴って性格も積極的に自分の意思で動くようになった。	中学校3年生の体育祭の時の事故で頚髄を損傷し、3か月入院後復学し、卒業後約1年間リハビリ入院をした。 障害受傷後、リハビリテーションセンターで選手から声をかけられて車いすラグビーを始めた。	仕事をしながらゴールボールを続けたい思いが強く、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の資格を全て取得して、所属している障害者スポーツ選手雇用センターと民間保険会社では現在も講演活動や体験会、ヘルスキーパーとしてのマッサージ業務を行っている。いずれも引退後を見越し、自分が社会に貢献できる方策を常々考えている。

項目	23-P	23-Q	23-R
調査年度	23	23	23
識別記号	66	67	68
生まれた年	2001	2003	2003
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分　※1	一般雇用	その他	その他
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支→普通	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A2	A2	A1
主実施競技　※2	自転車(トライシクル)	ボッチャ	水泳
パラスポーツ開始年齢　※3	高校1年生	15	11
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の 重要な他者　※3	(最初経験したスポーツは水泳だが、ここでは自転車について) 現在のナショナルチームの監督	(最初経験したスポーツは水泳(療育として)だが、ここではボッチャについて) ボッチャ協会のスタッフ	様々なパラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会のMさん、送迎や様々なサポートをしてくれた母親
パラスポーツ開始場所　※3	選手発掘事業　K陸上競技場～サイクルスポーツセンター	県立の障害者スポーツ体育館	Oスイミングスクール
パラスポーツ情報提供者　※3	県障害者スポーツ協会のNさん	ボッチャ協会のスタッフ	様々なパラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会のMさん
パラスポーツ開始場所 へのアクセス　※3		母親	家族
パラスポーツ開始前の スポーツの影響　※4	・なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の 重要な他者	ナショナルチームの監督やコーチまたチームの仲間 本人の雇用者としての母親		障害の特性に応じた指導をしてくれるコーチおよびトレーナー、練習場所への送迎をしてくれる家族
パラスポーツ継続状況	合宿中は午前中自転車練習、午後は自転車練習とウェイトトレーニング、合宿がない時は午前中練習、午後1時から6時半まで仕事、その後に再度練習するような生活。週6日練習している。	中学校の時にパラスポーツ体験会でボッチャを体験。その頃、県にボッチャ協会ができ、声をかけてもらったのをきっかけに、ボッチャを始めた。 高校生になり、県立の障害者スポーツ体育館ができ、高校1年からちゃんと練習を始めた。	小学校6年生の時、障害者の水泳クラブチームに入会。当初は週1回程度練習に参加。 中学生からは、週2回程度、高校生では週5回程度練習。クラブにはコーチが在籍しており、専門的な指導を受けることができた。 現在、大学に在籍し、週6回練習を行っている。大学にプールがないため、県立プールとスポーツクラブを利用。
支援	公的機関		
将来ビジョン	今現在は、2028年のロサンゼルスパラリンピックには出場したいと考えている。その後のことはあまり考えていない。それよりも今は目先のパリパラリンピックのことを一番に考えている。	現在、社会福祉士の資格取得を目指している。 将来は障害児の就学や就職支援に携わるような仕事がしたい。 ボッチャは大会でいい成績を残したいというようなのではなく、趣味として続けていきたい。	パリパラリンピックに出場しメダル獲得を目指す。その次のロス2028パラリンピックも視野にいれている。 愛知県で開催予定の2026アジアパラ競技大会にも出場したい。
その他 特記事項	母親が経営する会社に勤務しており、その点で競技継続に関して職場の理解も得やすいし経済的な不安も解消されている。 特別支援学校でもっといろいろな競技が体験できる環境があると自分のような状況の人もスポーツに入りやすいと考えている。	障害のある普通の青年がやりたい仕事を目指して勉強し、趣味としてスポーツを続けているという姿が非常に頼もしく、好ましく感じた。	様々なパラスポーツを体験することにより、自分に合った競技を選択することができた。しかし、小学校5年生までは体育の授業以外でパラスポーツに触れる機会はなく、情報もなかった。幼少期からパラスポーツに触れ、体験できる機会があればもっと早くパラスポーツを始めていたと考えている。

項目	23-S	23-T	23-U
調査年度	23	23	23
識別記号	69	70	71
生まれた年	1991	2000	2000
性別	男	女	女
居住地域	関東	東海	関東
調査時身分　※1	選手雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	10	18	小学校5年生
障害内容	視覚	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン	B5	B5	B3
主実施競技　※2	ゴールボール	卓球	卓球
パラスポーツ開始年齢　※3	23	21	中学校3年生
主実施競技の競技レベル　※2	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	国立障害者リハビリテーションセンターのゴールボール部のメンバー	陸上クラブの監督であったM先生、義理の兄	パラ卓球女子日本代表B選手、家族
パラスポーツ開始場所　※3	国立障害者リハビリテーションセンター	知人の職場の卓球クラブ	アスリート発掘プログラム（パラ卓球）
パラスポーツ情報提供者　※3	国立障害者リハビリテーションセンター		
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ポジティブ		ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	東京パラリンピック後、会社に残ることを勧めてくれた今の上司。 親（親に迷惑をかけた分頑張っている姿を見せてお返しをしたい。そのことがモチベーションになっている）	一緒に卓球をする役所のメンバー	コーチ、所属先企業
パラスポーツ継続状況	2017年、国リハを卒業と同時に現在の会社に選手雇用（正社員）として入社。 東京パラリンピックが終わり、引退したが上司のアドバイスもあり、会社には残った。引退後、育成コーチを1年間やった後、現役に復帰した。 合宿中は午前中練習、午後フィジカルトレーニングか練習、合宿がない時は午前中にNTCイーストでフィジカル、午後練習がある時は強化拠点施設で練習。	車椅子になってから卓球を始めたので、それが生活リズムをつくっている。仕事が終わって卓球をすることが生活リズムなので、それがないと生活が崩れてしまう。 卓球を継続するにあたって、職場の理解があること、一緒に卓球をする仲間の理解があることが大きい。	高校では卓球部に入らず、パラリンピック卓球に専念、大学では卓球部に入り他の部員と練習した。現在はパーソナルコーチのもとでほぼ毎日練習をしており、1日2時間～3時間程度、マンツーマンの指導を受けて、さらに3時間程度、コーチの指導している他の選手たちとともにグループで練習を行っている。
支援			勤務先
将来ビジョン	選手としてはロサンゼルスパラリンピックまではやりたいと考えている。 最終的には代表チームの監督をやりたいと考えている。いつのことになるか見通しがあるわけではない。	日本代表として国際大会に出場すること。その次は国際大会でメダルが取れる選手に。ロールモデルは同じクラスのCさん。昨年の全日本パラ卓球選手権大会で対戦し、オーラを感じるとともに憧れでもあり、そして勝ちたいという競技へのモチベーションにもつながっている。	直近の目標は、10月末に開催されるアジアパラ大会での優勝。来年のパリパラリンピックについては、ダブルスでの出場を目指している。 何歳頃まで現役を続けられるかわからないが、今のところは2028年のロサンゼルスパラリンピックまでは競技を続けたいと思っている。
その他特記事項	専門学校に入学、就職するが、視覚障害の壁に当たり、4年間在籍した後、国リハに入学した。国リハに入ったことが転機となり、視覚障害を受け入れ、前向きな気持ちになった。	卓球を通した仲間との出会い、さらには初級障がい者スポーツ指導員の資格も取得することになる。卓球が生活のリズムをつくっていると言えるほど、競技環境、職場、日常生活が充実しており、日本代表として国際大会の出場、さらにはメダリストを目指している。	障害受傷後、中学校時代に日本代表選手との出会いでパラ卓球の世界を知り、その後大会等に出場するようになった。

項目	23-V	23-W	23-X
調査年度	23	23	23
識別記号	72	73	74
生まれた年	2000	1970	1969
性別	男	女	男
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分　※1	選手雇用	その他	一般雇用
障害発生年齢	0	25	34
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン	A3	B5	B6
主実施競技　※2	卓球	サウンドテーブルテニス	車いすカーリング
パラスポーツ開始年齢　※3	12	38	40
主実施競技の競技レベル　※2	国内上位	国内上位	国際出場
パラスポーツ開始時の 重要な他者　※3	お互い本音で語り合える幼少期からの友達、障害をマイナスに捉えずプラスの方向に考えることを教えてくれた祖父、一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者	サウンドテーブルテニスに最初に参加した時の審判員（指導員）の方 S市の点字教室で視覚障害者協会の行事に誘ってくれたIさん	車いすバスケ、スキーをやっていた車椅子メーカーの方（最初の競技車いすバスケに関して）
パラスポーツ開始場所　※3	中学校の体育館	T市内の身体障害者福祉センターの体育館	K市の一般体育館（バスケ用車椅子が当時から10台くらい置いてあった）
パラスポーツ情報提供者　※3	一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者		車いすバスケ、スキーをやっていた車椅子メーカーの方（最初の競技車いすバスケに関して）
パラスポーツ開始場所 へのアクセス　※3			
パラスポーツ開始前の スポーツの影響　※4	・なし	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の 重要な他者	ライバルでもある同じクラスの選手、落ち込んだ時などに相談に乗ってくれる両親、障害に応じた指導をしてくれるコーチ	一緒にプレーしている視覚障害の仲間 S市を中心に応援してくれるボランティアSSピンポンに関しては、協会の会長Mさん	地元にカーリングホールがあること。健常者と一緒に試合ができること。 選手権やパラリンピックといった目標の一つ一つが大きな動機付け。スポンサーとして経済的支援をしている企業。
パラスポーツ継続状況	大学4年生で出場した全日本パラ卓球選手権大会後に行われた選考会を経て、次世代育成候補選手に選出。 大学卒業後はT社に就職。クラブチームに所属し、日本代表を目指している。 一般の卓球大会をはじめ、多くの卓球大会に出場し試合経験を積むことにも力を入れている。	障害発生後、各種制度の中でサウンドテーブルテニスの情報を収集し、自ら仲間を増やしたり、卓球台の購入を要望したりするなどしてプレーの機会が徐々に増えた。2015年にSSピンポンという競技を始めた。これはSTTのルールを修正したもので、視覚障害のない人も一緒にプレーすることが前提。聴覚障害があっても参加可能。晴眼者のペアでのダブルスも可能。現在、この競技の普及の中心的人物である。	2007年1月にチームをつくり、翌年に初めて日本選手権に出場して2位。 2012年に新チームを立ち上げ、2014年秋に世界選手権に出場。2016年、2022年は日本で優勝してフィンランドの世界選手権に出場。 現在、フレックス制で勤務。カーリングは週に1回～2回の練習、現在車いすバスケットボールを有酸素運動のトレーニングとしてやっている。
支援	勤務先		スポンサー
将来ビジョン	強化指定選手の枠を獲得し、国際大会に出場できる選手になること。	サウンドテーブルテニスでは全国優勝。SSピンポンを普及させたい。今後はSSピンポンに関してはスポーツ推進委員と連携して広めていきたい。 学校で運動はしたいのだけれど苦手だったりする子供たちのためのレクリエーション的な部活動に入れてもらえたら良いと思う。そのための働きかけをやっていきたい。	車いすカーリングのチームはどこもメンバーが集まらずに苦労しているが、所属チームは若い選手を含めて5人揃っている。札幌パラリンピックの招致がなくなった今、選手としてどこまで競技カーリングがやれるかわからないが、世代交代していく中で貢献したい。 競技の一線を退いたとしてもエンジョイカーリングをやっていると思う。
その他 特記事項	SNSを使って、日頃の練習のことなどの配信を始めたところ、フォロワーが徐々に増えている。自分を応援してくれる人がいることが モチベーションアップにつながっている。	新しいスポーツSSピンポンを開発し、障害のない人とともにスポーツを楽しむだけでなく、一緒にスポーツを楽しむ仲間として視覚障害によりできない部分をサポートしてもらうなど、スポーツを通した「共生社会」の実現を実践していると言える。	障害を持つ前にラグビーをしており、そこで培われた精神力や体力が現在に好影響を与えている。K市はある意味カーリングの町で、有名チームの本拠地でもある。町全体がカーリングに関心を持って応援しており、行政や企業、大学などが車いすチームも同じように応援・支援してくれている。

項目	23-Y	23-Z
調査年度	23	23
識別記号	75	76
生まれた年	1998	1991
性別	女	男
居住地域	北海道	東海
調査時身分　※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	重度	中度
学校種別	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A2	A3
主実施競技　※2	車いすカーリング	卓球
パラスポーツ開始年齢　※3	中学校入学前後	24
主実施競技の競技レベル　※2	国際出場	国内上位
パラスポーツ開始時の重要な他者　※3	（最初の競技はチェアスキーだがここではカーリングに関して）カーリングに誘ってくれた、チェアスキーを教えてくれていた人。送り迎えなどしてくれた両親	障害者卓球関係者
パラスポーツ開始場所　※3	T町にあった旧カーリング場	障害者卓球大会（日本肢体不自由者卓球協会主催のジャパンオープン）
パラスポーツ情報提供者　※3	近隣の車いす利用者	障害者卓球関係者
パラスポーツ開始場所へのアクセス　※3	両親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	カーリングチームメンバー（パラリンピック出場という目標）	中学校の時の卓球部のメンバー、他校のライバル、高校の先輩 大学卓球部のOB会会長、大学クラブのメンバーや他大学の選手 障害者卓球の役員のYさん
パラスポーツ継続状況	中学生で日本選手権、高校2年生で世界大会に出場。高校卒業後2年間専門学校に通い、様々な資格を取得。その後、地元医療機関からT町役場に転職。 専門学校在学中に車の免許を取り移動の制約がなくなる。現在、週2～3回練習するが、リーグ戦中は週4回の時もある。	現在はローカルな大会を含めると月に1回くらい試合に出場している。ほとんどは健常者の大会。 以前は週3回程度コンスタントに練習していたが、今は仕事が忙しいこともあり、週1回程度、試合前に2回か3回無理して練習。ほとんど障害のない人とやっている。
支援	公的機関	・なし
将来ビジョン	続けられるうちはカーリングを続けたい。札幌パラリンピックに出場するという夢もあったが大会開催が難しい状況で、どこまで自分が続けられるかはわからない。できれば今よりもうまい選手になっていたい。	今後も卓球を続けていく気持ちはあるが、トップ選手との差は歴然としていて、そこまでは行きつかない気がしている。自分の目標を設定してやっていきたい。今年の全国障害者スポーツ大会に出場し、非常に良い体験ができた。それまで断り続けていた県の障害者卓球協会役員の依頼を受けることにした。
その他特記事項	まずはカーリング場があったこと、スキーのような恐怖感もないこと、チームメンバーに温かく迎え入れられたことなどからカーリングを始めることができ、また、継続することができている。札幌でのパラリンピック開催が怪しくなってきたことから、ややこの先の目標の掲げ方が定まっていない印象を受けた。	幼稚園、小中高校、大学と一般の学校に通学し、中学校の部活で卓球を始めた。障害者の大会に出るという認識は大学卒業までなかった。高校2年で一旦卓球から離れるが、大学に入って再開。その後障害者手帳を取得し、障害者卓球大会に出場したが自分より障害の重い選手に負け衝撃を受ける。全国障害者スポーツ大会で他の障害のある人たちと出会い、刺激を受け、競技を続ける一方で障害のある人の卓球の普及や振興にも携わろうと考えている。

■2024 年度

※1　調査時の雇用形態を示している過去に選手雇用があった場合も含む
※2　スポーツキャリアパターンは、第 1 章第 2 節参照

項目	24-A	24-B	24-C
調査年度	24	24	24
識別記号	77	78	79
生まれた年	1999	1977	1970
性別	男	女	男
居住地域	関東	関西	関東
調査時身分　※1	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン　※2	A3	A2	A5
主実施競技　※3	水泳	射撃	射撃
パラスポーツ開始年齢	3	21	47
主実施競技の競技レベル　※3	国際入賞	国際出場	国際出場
パラスポーツ開始時の重要な他者	父親	射撃（ビームライフル）を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ（自身も射撃選手）	大会を初めて見に行って、様々な情報をくれた人
パラスポーツ開始場所	父親がコーチを務めるスイミングスクールのプール	障害者対象のビームライフル教室を開講しているIスポーツセンター	K県のI射撃場
パラスポーツ情報提供者	パラ水泳競技連盟の方	射撃（ビームライフル）を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ（自身も射撃選手）	大会を初めて見に行って、様々な情報をくれた人
パラスポーツ開始場所へのアクセス	両親	本人	本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	小学校は父親で、中学校は父親と自分に一目置いてくれていた後輩たち 高校も父親で、大学は障害があって水泳部に所属していたNさん（よく一緒に練習をした）	S選手（大会でよく優勝していて、憧れの遠い存在） 両親と家族、コーチ、会社の人たちの応援。夫は大会等に帯同してくれている。	一緒にピストルをやっている仲間
パラスポーツ継続状況	小学校5年の時にパラ水泳関係者と出会い、パラ水泳の大会に出場するようになった。 小・中と週3回のペースでスイミングスクールに通い、高校、大学では水泳部に所属。 東京パラリンピックの選考会を最後に水泳は引退。	2010年に実銃（エアライフル）の免許取得。2013年に初めて国際大会に出場し、40歳前後でライフル銃の免許も取得。 2017年にアスリート雇用でV社に転職。現在週3日は射場で練習し、ほかの日は自宅でシミュレーションの機械を使って練習。メンタルトレーニングのコーチからオンライン等で指導を受けている。 ロサンゼルス大会を目指している。 現在は健常者の試合にも出るようになり、昨年は12回大会に出場した。	現在もK県の射撃場で練習をしている。最初のころは週に1回は行っていたが、最近ではそこまで行けていない。 射撃場に行って撃つのも練習だが、現在は疲労が蓄積することもあり、撃つ練習は月に1度くらいに減らし、自宅でできる練習を行っている。 自宅ではインナーマッスルを強化する練習や引き金をスムーズに引く練習を週に1度程度実施している。 現在年6回程度は様々な大会に出場。
支援	なし	勤務先	なし
将来ビジョン	今すぐにとはいかないかもしれないが、10年後、20年後スポーツに関われる部署で仕事ができればと考えている。またそういうことができないか模索している。	パラリンピックに出場することと、長く競技を続けることが目標である。年齢とともに体力は落ちてくる、しかし競技レベルは下げたくないし、かといって障害のこともあり、体に大きな負担はかけたくない。そうした中でいかに続けていくかが課題となっている。	ロサンゼルスパラリンピックを目指す。そのためにも、5段（564点）をクリアしたい。当面は全日本パラ射撃選手権で3連覇をしたい。 競技の普及も考えているが、わずか5人なのでどうしていいのかわからないのが正直なところである。 選手雇用も考えなくはないが今の安定した生活も捨てがたく、踏み切れない。
その他 特記事項	高校時はほかの水泳部員とともに練習したことでモチベーションが高くなったり、また、様々な刺激を受けていた。 大学時は競技レベルの違いから他部員と練習できず、一人であるいは、同じ障害の選手と二人での練習が多く、モチベーションの維持に苦労した。 障害のある選手にも障害のない選手と同じように大学から支援（練習時間帯やプール使用、コーチ帯同など）があればモチベーションに好影響があったかもしれないと感じている。	障害特性からほとんど運動には縁のない生活が、ビームライフル射撃を知ったことでスポーツを行うようになった。 身体接触のないターゲット系の競技と出会えたことが競技生活への入り口。 きっかけが運転免許証更新時の担当者からの情報提供と、通える範囲に障害者を対象とした施設があったという偶然が作用したと考えられる。 障害者のアスリート雇用制度の恩恵。 長く継続できる競技特性があり、長く競技を続けることが目標となっている。	銃所持に関する様々な条件があり、それらをクリアすることで、銃の保持を維持し、選手を継続できている。 脳性麻痺という障害の特徴から体の動きに制限があることが疲れやすさや各種スポーツ、学校体育への参加に制限を加えていた。

※3　現在を含めパラスポーツとして主として取り組んできたもので、現在実施している競技と異なる場合もある
※4　先天的障害者の場合は「なし」としている

項目	24-D	24-E	24-F
調査年度	24	24	24
識別記号	80	81	82
生まれた年	2001	1986	1980
性別	男	男	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分　※1	その他	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	3歳頃	0	0
障害内容	聴覚	聴覚	肢体
障害程度	軽度	重度	中度
学校種別	特支→普通	特支	普通
スポーツキャリアパターン　※2	A4	A2	A3
主実施競技　※3	デフハンドボール	棒高跳び、サーフィン	パラカヌー
パラスポーツ開始年齢	21	17、31	29
主実施競技の競技レベル　※3		国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	進学先の大学教授	高校の恩師H氏	日本カヌー連盟の知人。カヌー教室などを開催した際に、中学時代から健常者に交じってカヌーをやっていたことを覚えていてくれた。
パラスポーツ開始場所	進学先の大学ハンドボールサークル	通っていた高等ろう学校	戸田漕艇場
パラスポーツ情報提供者	進学先の大学教授	高校の恩師H氏	日本カヌー連盟の知人
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	本人	妻・兄
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	進学先の大学教授N1氏、大学女子ハンドボール部OGで日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会のN2氏、デフハンドボールGKのM氏、レジェンド的存在の選手T氏	ビデオを撮ったり相互にアドバイスした大学の友人と、技術に関して指導を受けたりアドバイスを求めた先輩Kさん 競技環境整備のアドバイスをいただいたY大学の指導者Hさん	兄と妻。舟を水面まで運んでくれて、移動のサポートをしてくれている。兄はカヌースプリントの経験者、妻は水上支援するためにカヌーを漕げるように訓練してくれた。
パラスポーツ継続状況	高校でハンドボールを始め、大学3年生でデフハンドボール日本代表チーム設立を目指して再開。現在メンバーが20名となり定期的に練習ができるようになった。月に1回の合同練習と週に1回のT地区での練習を継続してきたが、練習拠点となる場所がまだない。 2024年度の東京都社会人ハンドボールリーグに「デフハンドボールクラブ」として加盟、チームの強化を図り東京2025デフリンピックでプレーすることを目指している。	2003年から棒高跳びを専門とする。 2009年から3大会連続デフリンピックに出場し2017年国際大会入賞後引退。ろう学校の指導者としても活躍。 2018年、幼少期に経験したサーフィンを始め、2021年にはデフサーフィン選手として、聴者の大会にも出場。 波がある時は、早朝に波に乗ってから出勤するという生活をしているが、当面はサーフィンを極めるために継続したいと思っている。	2010年にリオパラリンピックの実施競技にカヌーが加わる可能性が高まり、パラカヌーを始めた。 2027年に延期されたワールドマスターズゲームズ関西への出場を目標に競技を継続している。 パラカヌーはモチベーションが続く限り継続していく。
支援		なし	勤務先
将来ビジョン	東京2025デフリンピックで日本代表としてプレーすることが目標。 東京都社会人ハンドボールリーグの4部に「デフハンドボールクラブ」として加盟し試合経験を重ねることを目指して準備を進めているが、経済的な支援が不足しているため、スポンサー等についても探していく必要がある。	サーフィン検定で2級の取得。 指導者として、ろうの子どもたちのスポーツ環境を整えたいと思いNPO法人の立ち上げ構想を持つ。今は資金持ち出しなので助成金の獲得ができればいい。 今後も一生涯、何らかのスポーツをしていると思う。スポーツの楽しさをろうの子どもたちに伝えて経験してもらえるような存在になればいい。	自分が納得できるまでパラカヌーができたら競技は引退して、指導者として活動していきたいと考えている。パラカヌーでは、障害者が障害者をコーチングするスキームができていないので、自分がその道をつくっていきたい。
その他 特記事項	デフスポーツを継続するためには、国内に潜在しているデフプレーヤーと指導者、専門競技に精通した手話通訳者、支援者などが有機的に連携していくことが必要である。 小学校6年生ですでに160cmを超え、中学校で180cm、現在は192cmという体格に恵まれたことも、競技スポーツへのモチベーションにつながった。	最初からデフリンピックを目指していたわけではなく、棒高跳びがデフリンピック種目だったということで、デフリンピックにも出場した。 棒高跳びの競技特性に、短距離走や跳躍と器械運動で培った空中姿勢や空間把握能力が適合した。 幼少期から体を動かすことが大好きで、身近な環境としてスポーツがあったことや高い身体能力での成功体験が競技スポーツへの誘いとなっていた。	先天性の障害であるが、10歳から健常者に交じってカヌーを始め、高校では県代表としての国体出場、大学ではインカレ出場と、下肢障害がある中でも、全国レベルで競技に取り組んだ。 リオパラリンピックでカヌーが競技に追加されることが決まってから、パラカヌーの日本代表選手になる機会を獲得。

項目	24-G	24-H	24-I
調査年度	24	24	24
識別記号	83	84	85
生まれた年	1964	1995	1981
性別	女	男	男
居住地域	関東	関東	東海
調査時身分　※1	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	10	0	0
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン　※2	B1	A3	A4
主実施競技　※3	パラ馬術	パラ馬術	視覚障害者柔道、グランドソフトボール
パラスポーツ開始年齢	47	20	21～22、30～31
主実施競技の競技レベル　※3	国際入賞	国際出場	国際入賞（柔道）
パラスポーツ開始時の重要な他者	夫と英代表のソフィー・ウェルズ選手	アスリート雇用で採用してくれた企業	盲学校の柔道が専門の先生
パラスポーツ開始場所	体験から受け入れてくれた乗馬クラブK	S乗馬クラブ	盲学校の体育館
パラスポーツ情報提供者	夫	S乗馬クラブの指導者（パラリンピアン、自身は脊椎損傷で車いす利用者）。	盲学校の柔道が専門の先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	指導者	親、特に父親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	家族の理解、夫の後押し、所属先会社、受け入れてくれる乗馬クラブ、応援してくれている関係者の皆さん	S乗馬クラブの指導者（パラリンピアン、自身は脊椎損傷で車いす利用者）	視覚障害者柔道：盲学校の柔道専門のS先生、町道場の先生、練習仲間、練習場への移動を担ってくれた親、特に父親。／グランドソフトボール：盲学校の時の友達
パラスポーツ継続状況	44歳で乗馬を始め、47歳でパラ馬術の大会に出場、2016年強化選手、2018年度東京アスリート認定選手に選出。パラリンピック出場を目指した。 2017年より契約社員となり、出社は月に1回。週3日から4日は乗馬クラブでのトレーニング。ほかに、ビデオ分析や馬学、コンディショニングトレーニング。 パリパラリンピックを目指すため、オランダでの強化レッスンを昨年9月から月に1回行う。12月に国際大会出場。	大学3年時に、東京2020パラリンピックへの参加を考え乗馬でパラリンピックを目指そうと決意。パラリンピアンが教えてくれるS乗馬クラブに入り、指導者との共同生活を始め、食事の提供、車による移動支援も受けている。 ジュニアの選手と馬を共有する機会も多く、英語が堪能なことから、海外の大会では選手兼通訳をすることもあり、競技者であると同時に、サポート役を務めることが年々増えてきている。	盲学校で21～22歳の時、視覚障害者柔道大会に出て準優勝した。22～23歳の時初めて国際大会に出場し、2007年に国内大会で優勝し、世界選手権で入賞した。2008年の北京パラリンピック出場後は大きな大会には出場せず、32～33歳で引退した。 30～31歳でグランドソフトボールをやっていた盲学校時代の友達に誘われて始めた。現在は週1回練習をして全国障害者スポーツ大会に出場した。
支援	勤務先／公的機関	勤務先	公的機関
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指し、目標にはまだ遠いので近づくように努力したい。通常レッスンは継続し、半年に1回はオランダでの強化レッスンや遠征の予定。 ホースセラピーや障がい者乗馬のサポートをしている。いろんな人に馬に乗ってほしいと思っている。 馬術によりスポーツの楽しさを知り、馬術以外にもスポーツを探したい。	今後は、選手を継続しつつも、後輩への支援をしていく予定である。 自身がホースセラピーを体験したことでパラ乗馬に興味を持ったように、まずはホースセラピーを体験できる機会を増やして裾野を広げる活動にも携わっていこうと考えている。	柔道も体が動くならもう一度やってみたいと思うこともあるが、難しいと思う。 グランドソフトボールは体が動く限り、続けていきたい。
その他 特記事項	障害は、受傷部位を隠したいもの、見られたくないものとして存在した。特に着替えが阻害要因となって、学校における「体育」は、する対象ではないと捉えられてきた。しかし未来体を動かすことは嫌いではなく、環境が整えば、趣味として、さらには競技としてスポーツができることを体現している。 パラ馬術は、サポートがあって継続できている。場所によっては片手で乗るのは怖いというクラブもあるので、受け入れてくれる乗馬クラブでないと厳しい。	以前、ホースセラピーを体験していたことで乗馬への抵抗感がなくなっていた。 パラ馬術に挑戦しようと思ったタイミングと、東京2020パラリンピックに向けてアスリートを支援する企業が増え、実績ゼロの状態でのアスリート雇用契約を結ぶことができた。	視覚障害が進む前に柔道を始め、そのころから障害のない柔道関係者と接していたことが視覚障害者柔道として柔道を行う時の理解が得やすくスムーズな移行ができたと考えられる。 視覚障害者柔道、グランドソフトボールとも盲学校を起点としたスポーツの取り組みであり、視覚障害者のスポーツ実施にとって盲学校は大きな影響を及ぼしている。

項目	24-J	24-K	24-L
調査年度	24	24	24
識別記号	86	87	88
生まれた年	1976	2003	1974
性別	男	女	女
居住地域	東海	関東	関東
調査時身分　※1	一般雇用	その他	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	視覚	肢体	聴覚
障害程度	軽度	重度	重度
学校種別	普通	普通	特支→普通
スポーツキャリアパターン　※2	A5	A2	A1
主実施競技　※3	グランドソフトボール（視覚障害者野球）	車いすバスケットボール、カヌー、陸上	競泳
パラスポーツ開始年齢	34	大学1年、小学5年、中学1年生	25
主実施競技の競技レベル　※3	国内上位	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	盲学校1年生の時の担任教師	車いすテニス：両親／陸上：両親／カヌー：区長、K区職員でパラカヌーの選手／車いすバスケ：元車いすバスケ日本代表選手Nさん	ポスターにあった「障害者募集中」の文字、障害者水泳クラブの仲間
パラスポーツ開始場所	盲学校のグラウンド	車いすテニス：C県K市のテニススクール／車いすバスケ：自宅近くの簡易コート	S市民スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者	盲学校1年生の時の担任教師	父親（障害者スポーツに関する情報をインターネットやメールマガジン障害者スポーツセンターの掲示などから得ていた）	障害者水泳クラブの仲間
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	父母	本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	チームの仲間	両親、元車いすバスケットボール選手Nさん	Jアスレティッククラブの仲間、ろう者スイマーYさん、Iスイミングクラブの仲間
パラスポーツ継続状況	盲学校卒後、2011年（34歳）、盲学校1年の時の担任の教師にグランドソフトボールを見学に来ないかと誘われ見学に行き、そこからグランドソフトボールに関わるようになった。 その年の全国障害者スポーツ大会に出場し優勝した。 現在、週に一度、日曜日に休憩時間も含めて6時間くらい、ほぼ県の障害者福祉センターのグラウンドで練習をして、年に7回くらい大会に出場している。	幼小期に車いすテニス、チェアスキー、カヌーを始め、中学では、陸上とカヌー、水泳が中心だった。 車いすバスケは小学3年生の時初めて体験し、高校2年生ごろチームに登録するようになった。現在は車いすバスケが中心でそのトレーニングとして陸上競技をやっている。車いすバスケの練習は週に4回程度、陸上競技の練習は週に1回程度、自宅でローラーを使ったり、陸上競技場に行ったりしている。	水泳を始めたら、泳げるようになることとタイムがよくなることが楽しくのめり込んだ。よりレベルの高い大会を目指すために、仕事終わりに遠方まで運転して練習に行く毎日を送った。障害者水泳クラブでは多くのろう者と知り合うことができ障害者の大会とマスターズのどちらか月に1回出場していた。 6年前に結婚し、昼間の時間帯にマスターズ同好会メンバーと練習し、マスターズ大会一本に絞って出場している。
支援	公的機関	公的機関	
将来ビジョン	体が動く限りはグランドソフトボールを続けていきたいと考えている。競技が残っていればという前提だが。 指導者になろうということは考えていない。みんなとわいわいやれればいい。	車いすバスケットボールに関しては現在、次世代カテゴリーにいるが、その上のハイパフォーマンスカテゴリーに入り、パラリンピックに出場したいと考えている。これが現在スポーツを続ける上でのモチベーションになっている。 将来的にはパラスポーツを続けながら仕事ができる環境があればいいと思う。	マスターズ登録（100歳登録）をしているので、いつまでも環境が許せば泳ぎ続けたいと思っている。
その他 特記事項	遠近感がわかりにくいことがあるが、卓球やそのほかのスポーツを経験していたことで、そのことにどう対処すればいいのかということは身についたと考えている。できるだけ長く続けたいが、盲学校に行く生徒が少なくなり、選手数が減少してきており、競技が存続するかが一つの課題となっている。	車いすテニスに始まり、陸上やチェアスキー、カヌーや車いすバスケットボールなどを経験してきている。 東京でパラリンピックが開かれることが決まってから、パラスポーツに関する様々な情報が増えたり、体験会が増えたり、カヌー会場が近かったりしたことがポジティブに影響している。またパラリンピック開催を機に設けられた助成金制度の対象にもなっている。 両親の強力なサポートがスポーツ実施の後押しとなっている。	学齢期はスポーツとは無縁であったが、25歳の時にたまたま出かけた地元のスポーツセンターに掲示されているポスターを見ていた時に、「障害者募集中」という文字が目に入り、それが契機で水泳を始めると夢中になり、競泳選手として大会に出場するようになった。 水泳を通して人生のパートナーとも知り合うこととなり、生活環境は変わったが、これからも水泳人生は続いていく。

項目	24-M	24-N	24-O
調査年度	24	24	24
識別記号	89	90	91
生まれた年	1991	1975	1990
性別	男	女	男
居住地域	関東	関西	関西
調査時身分　※1	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	1歳3か月	0	2
障害内容	視覚	聴覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支	普通	特支
スポーツキャリアパターン　※2	A2（先天扱い）	A5	A1
主実施競技　※3	ブラインドサッカー、ゴールボール	バドミントン	陸上競技
パラスポーツ開始年齢	小学校5年、高校1年	21歳ごろ	中学校入学後
主実施競技の競技レベル　※3	国際入賞	地域	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	小学校5年時の担任の先生	幼馴染み、交際しているパートナー	小学部の担任の先生、視覚支援学校の陸上部の先輩
パラスポーツ開始場所	他県の小学校のグラウンド	近隣市の障害者スポーツセンター	在学していた視覚支援学校
パラスポーツ情報提供者	小学校5年時の担任の先生	幼馴染み	視覚支援学校の陸上部の先輩
パラスポーツ開始場所へのアクセス	小学校5年時の担任の先生、父母	本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	ブラインドサッカー：当時同じチームで代表チームに入っていたT選手／ゴールボール：監督の先生／家族	交際しているパートナー（デフの選手）	ガイドランナー、妻
パラスポーツ継続状況	小5でブラインドサッカーを始め中3で日本代表入り。高校の時にゴールボール部とフロアバレーボール部に入り土日はブラインドサッカーをやっていた。 高校3年（2009年）の時にゴールボールの日本代表チームに入り、以降2014年までゴールボールに専念。 2015年にブラインドサッカーに戻り自分のチームを立ち上げ、2022年に日本代表チームに復帰。2023年にパリパラリンピック出場権を得た。	幼馴染みからの声がけがあり、交際していたパートナー（学校の後輩）がたまたまバドミントン経験者であったことからバドミントンを始めることができた。現在の障害者バドミントンクラブに入り、20年以上活動を継続。 現在は週に1回クラブの練習に参加し、コロナ禍以後は、年4回程度大会に出場している（全国ろうあ者体育大会や日本デフバドミントン選手権、各地域のクラブ主催の交流大会等）。	高等部時代に本格的に陸上競技に取り組み、大学には陸上部がなかったため、一年かけて活動拠点を作り、複数のマラソンクラブにも所属し、ほぼ毎日練習。就職後、国際大会に出場し、東京2020パラリンピック出場を目指すも叶わず、同年に引退。 今後は、趣味として、走りたい時に走ることができればと考え、現役時代のガイドランナーとは今でも一緒にジョギングをしている。
支援	勤務先／公的機関		なし
将来ビジョン	自分のチームを立ち上げた時からブラインドサッカーの普及や選手育成に関わりたいと考えていた。 トップ選手になるためには小さい時から競技を知り、親しみ、技術を身につけることが必要。そのためにもブラインドサッカーに関する情報に触れる機会、競技できる場が必要だと考えている。	バドミントンは激しいスポーツなので、無理をすることなく健康第一でできる範囲で続けていきたいと思っている。 来年日本でデフリンピックが開催予定となっており、これからデフリンピックを目指す、もしくはバドミントンを頑張っていきたい人のサポートをしていきたいと考えている。	旅行やアウトドアの活動が好きだが、視覚障害がありなかなか外出ができない、趣味の活動が楽しめないという人たち向けに、環境づくりや情報発信をしていきたいと考えている。
その他 特記事項	体を動かすことが好きだったこと、ブラインドサッカーの情報を得たこと、高校時にブラインドスポーツの部活があったことがスポーツキャリアに影響を及ぼしていると考えられる。 日本ブラインドサッカー協会は、パラスポーツ競技団体のマネジメントに関して日本でトップの競技団体であり、競技団体の着実な発展と成長が選手の境遇や競技強化に影響を与えている。	小学校時代はバスケットボールに取り組み、中学校・高校は軟式テニス部で活動していた。 バドミントンだけでなく、バレーボールや卓球等、聴覚障害のある人のスポーツ参加が少なくなっており、どうすれば参加してもらえるのか、これから考えていきたいと思っている。 他競技の関係者と相談をして、複数種目を同時に体験できるような機会を作りたいと考えている。	子どものころから体を動かすことが好きだったが、水泳が苦手だったことが後に陸上を始めたきっかけとして影響。 地方の学校では指導できる先生がおらず、生徒数が少ないため部活動自体がないという状況があるが、部活動の指導者がいて、一緒に走る仲間がいるという環境がとても大きかった。 スポーツのためには、健常者のサポートが必要であり、スポーツをしたい視覚障害者とサポートしたい健常者をつなぐシステムがあればよいと思う。

項目	24-P	24-Q	24-R
調査年度	24	24	24
識別記号	92	93	94
生まれた年	1983	1973	2002
性別	女	男	女
居住地域	関東	北海道・東北	東海
調査時身分　※1	一般雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	5	29	1歳半
障害内容	視覚	視覚	聴覚
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	特支
スポーツキャリアパターン　※2	B5	B5	A1
主実施競技　※3	社交ダンス、ブラインドダンス	視覚障害者マラソン	水泳（バタフライ）
パラスポーツ開始年齢	33	33	5
主実施競技の競技レベル　※3	国際入賞	国際出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	視覚障害者の社交ダンスの存在を教えてくれた友達、一緒に体験に参加した全盲の方、ブラインドダンスサークル代表M氏	トライアスロンをしていた寄宿舎指導員の女性教員、理療科教員養成施設時代の同級生でブラインドランナーのO選手	地元Sスイミングの店長、母親、姉、妹
パラスポーツ開始場所	Hブラインドダンスサークル	盲学校のグラウンドや盲学校周辺の歩道	地元スイミングスクール
パラスポーツ情報提供者	視覚障害者の社交ダンスの存在を教えてくれた友達	トライアスロンをしていた寄宿舎指導員の女性教員、理療科教員養成施設時代の同級生でブラインドランナーのO選手	母親
パラスポーツ開始場所へのアクセス			母親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ポジティブ	ポジティブ	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	指導者の Tさん、ペアのパートナーのNさん	ブラインドランナーのOさん、日常的に一緒に練習しているHクラブのランナー	Sスイミングの選手コースを教える立場のI先生、母親、聴覚障害に理解のあったKスイミングのNコーチ、長いスパンで目標設定してくれた有料の個人コーチA氏
パラスポーツ継続状況	偶然近くにブラインドダンスのサークルがあり、体験に行き入会した。 ダンスを始めて半年ぐらいで大会に初めて出て以降、ブラインドの大会には継続して出場している。 サークルが「自由練習」として部屋を確保してくれている枠があり、その時に行って練習している。ほかに、先生の教室に週2回くらい通っている。レッスン自体は1時間弱で、トータル3時間程度の練習をしているが、ちょうどいい。	34歳のころ、視覚障害者のランニングチームに参加するようになり、同年初めてフルマラソンの大会に出場した。 2010年にはブラインドマラソンの強化指定選手となり、強化合宿の費用がかからなくなった。 2011年ころ一般のランニングクラブに入り、室内の400mトラックで練習し、走力の高い人に伴走をお願いもした。 2023年の引退後も引き続きランニングを楽しんでいる。	小学部6年で日本デフ水泳選手権大会に初めて出場。中学2年生の時に自宅から近いスイミングに移籍してから多くの大会に出場。中学3年生の時に障害者チームに入り、様々な障害を持った人たちと一緒に練習を始めた。高2の時にKスイミングに移籍、障害者のスイミングクラブも並行して在籍。 現在、大学の水泳部メインで活動。 有料の個人コーチA氏の指導は、大学3年の春まで。
支援		公的機関	
将来ビジョン	社交ダンスにはクラス分けもないので、全盲と弱視の人が一緒に戦わなくてはならない。パートナーが見つからないと大会に出ることができないので、晴眼者に視覚障害者でもダンスができるということを知ってもらうために晴眼者の大会にも出て戦っていこうと考えている。	トップ選手としては引退した今、今後は楽しくランニングを続けていきたいと考えている。 盲学校の生徒や視覚障害の人、若い世代にスポーツをする楽しさや、目標に向かって努力することの大切さを伝えたい。	大学卒業後は地元の県内に残りプールで練習しようと思う。 アスリート雇用で企業に就職して引き続き選手を続けて、東京デフリンピック、3年後の世界大会、4年後のアジア大会、5年後の次のデフリンピックに出場したいと考えている。
その他 特記事項	幼児期から弱視であり、学齢期には体育やスポーツでよい思い出がなかったが、大学で視覚障害者向けのスポーツを経験したことにより「見えなかったからできなかっただけで、そんなに極端に運動神経が悪いってわけでもなかった」と思えるようになり、自分も意外とできると感じられたことがスポーツへの誘いとなった。	視覚障害となり、一人で様々なことができなくなった時にマラソンと出会い、少しずつ記録がよくなることで自己肯定感が高まった。その点でスポーツの存在が大きな意味を持っていた。 インタビューの少し前に、マラソンへのきっかけを作ってくれた女性が現在住んでいるオーストラリアのゴールドコーストのマラソン大会に出場し、トップ選手時代には味わえなかったマラソンの楽しさを味わってきた。	幼少時には顔に水がかかるのも苦手だったが、父親に海に何度となく連れていってもらい泳げるようになりたいと考えるようになった。 5歳のころ、スイミングスクールに入るにあたっては障害に対する理解のなさから3か所で断られるが、理解のあるクラブに入れた。 高等部の時にKスイミングのNコーチに出会って初めて聴覚障害のことを理解して教えてもらえた。

項目	24-S	24-T	24-U
調査年度	24	24	24
識別記号	95	96	97
生まれた年	1987	1992	1989
性別	男	男	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分　※1	選手雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	15	0	16
障害内容	視覚	聴覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン　※2	B2	A3	B4
主実施競技　※3	ローイング、クロスカントリースキー	デフラグビー	パラ水泳、ブラインドダンス
パラスポーツ開始年齢	29、31	高校3年合宿	23、27
主実施競技の競技レベル　※3	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	視覚障害者柔道：大学のクラスメートの柔道選手／ローイング：大学院進学先の大学ボスドクの知人	デフラグビー発起人のOさん	パラ水泳：SNSを通じて知り合い、パラ水泳のクラブなどを教えてくれた人／ブラインドダンス：ブラインドダンスパーティーに誘ってくれた視覚障害者
パラスポーツ開始場所	柔道：T1大学／ローイング：東京都パラリンピック選手発掘プログラム	デフラグビー：全国合宿	水泳：T障害者スポーツセンター／ブラインドダンス：ライオンズクラブのパーティー
パラスポーツ情報提供者	視覚障害者柔道：大学のクラスメイトの柔道選手／ローイング：東京都パラリンピック選手発掘プログラム	デフラグビー発起人のOさん	水泳：SNSを通じて知り合いパラ水泳のクラブを教えてくれた人／ブラインドダンス：パーティーに誘ってくれた視覚障害者
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	ネガティブ	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	ローイング：よきライバルであった視覚障害があるローイング選手/クロスカントリースキー：選手兼コーチのガイドの方	現在働いている法人W	近くで活動しているパラ水泳のクラブにいたAさん、オリンピックレベルの指導者N1さん、N大学のN2先生、Fさんなどのコーチ陣とタッパーのKさん
パラスポーツ継続状況	20歳のころ、視覚障害者柔道を始めて7～8年継続。28歳で東京都の選手発掘プログラムに参加し、ローイング競技から声をかけられ本格的に開始。最初は仕事をしながら深夜練習をしていたが1年くらい続けて東京パラに向けて仕事を辞し、アスリート雇用で現在の企業で競技を続けている。 ボートの単一動作の反復だけでなくクロストレーニングの重要性を知り、冬季はクロスカントリースキーのトレーニングを始めた。	ラグビーの強豪大学でトップレベルのラグビーと向き合い公式戦出場を果たした。大学4年間で「ラグビーはやり切った」と思い、第一線から離れ趣味程度で楽しもうと思った。 卒業後に一時休止していたデフラグビーでの活動を再開、世界大会で日本代表キャプテンを務め、普及や強化活動に取り組んでいる。現在はW法人に所属し、子どもたちにラグビーの指導もしている。	2015年に、選手雇用で転職。2017年に都内大学院に進学し、奨学金や各種補助金で金銭的に楽になる。コロナ禍は、地元に帰り高校時代の仲間の伝手でプールを使ったり、自宅の庭に小型プールを設置して練習した。 東京パラ後、スペインに練習拠点を移す。日本とのスポーツに対する価値観の違いに刺激された。パリ大会が近づき、タッピングの連携のことなどもあり、練習拠点を国内に戻した。
支援	勤務先		公的機関
将来ビジョン	ローイングと並行してトレーニングとして始めたクロスカントリースキーを現在メインとしている。ローイングはロサンゼルス大会で新クラスができチャンスがあればという意識でいる。スキーと重ならないところで練習や合宿に参加し、競技活動は続けているが、スキーをメインでやる上で、フィジカルトレーニングの一環という位置づけで継続していく。	強化の面では、世界大会優勝か優勝ができなくてもそこに挑む姿を多くの人に見せること。育成世代には、デフラグビーで頑張っている姿が刺激になる、明るい未来があることを伝えたい。 デフラグビーを何をもって広めたことになるのかと考えた時、最も難しい課題である「デフラグビーのアジア大会を開催すること」、これが最大の目標である。	トップ選手としていつまでやれるかわからないが、2026年アジアパラ大会までは競技選手としてやりたい。 今後、ブラインドダンスの競技会に出るなどしてもう一度ダンスを本格的にエンターテイメントとしてやってみたい。 ライフワークとして「非認知教育」に取り組みたい。頑張ること自体楽しいというマインドセットを普及させたい。
その他 特記事項	代表になるチャンスがあることを知り、本気で競技スポーツと向き合うことができ、障害をプラスに捉えることができたという意味でパラリンピック、パラスポーツとの出会いは障害受容への大きなきっかけであった。 研究職としての専門性が競技継続に影響している。自ら調べてクロストレーニングの一環としてローイングとクロスカントリースキーを行うことや、目標値を計算し具体的な計画のもとで実践することでモチベーションを高く保っている。	自らが積極的に切り拓く姿勢があった。これは両親や姉の影響が大きい。父や姉から勧められた『三国志』『キャプテン翼』『シュート！』などの漫画は、日常で得られない「見える会話」を学ぶことも多く言葉の獲得や競争心を高めるのに大きな影響を受けた。 大学の監督から「ユーモアがない」「わかったふりをしない」と助言を受け、字幕付きでお笑いのテレビ、ナイツやサンドウィッチマンを見てユーモアを学び、監督からは人生哲学を学んだ。	水泳、競技ダンスともパラ競技として取り組む前に本格的に行い、その後パラスポーツとして実施している。 世界トップクラスの成績を持つが、勝利がすべてではなく、努力することを楽しむというマインドを持っている。 パラリンピックを目指す期間と日本のパラスポーツ環境が激変する期間が重なっており、NTCイーストの完成や各種制度や補助金の恩恵に与れている。 将来的には、他競技にもう一度シフトしていきたいという展望を持っている。

項目	24-V	24-W	24-X
調査年度	24	24	24
識別記号	98	99	100
生まれた年	1983	1991	1992
性別	女	男	男
居住地域	関東	関西	関西
調査時身分　※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体・視覚	聴覚	聴覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支	特支→普通	特支→普通
スポーツキャリアパターン　※2	A2	A3	A2
主実施競技　※3	水泳、陸上、パワーリフティング	バドミントン	デフバレー、デフビーチバレー
パラスポーツ開始年齢	13、15、39	大学1年	12、20
主実施競技の競技レベル　※3	国際出場	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	陸上：学校の先輩（車いすマラソンに出場）、マラソンに出場していた年長の車いす利用者／パワーリフティング：公共施設のジムに同行したガイドヘルパー	聴覚障害のある大学の先輩	デフバレー：中学部の担任であった体育の先生／デフビーチバレー：友人（2014年時）
パラスポーツ開始場所	陸上：障害者スポーツセンター／パワーリフティング：公共施設とレンタルジム	大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンクラブ	デフバレー：O市立聾学校中学部／デフビーチバレー：桜ノ宮ビーチ
パラスポーツ情報提供者	陸上：学校の先輩、マラソンに出場していた年長者／パワーリフティング：ジムに同行したガイドヘルパー	聴覚障害のある大学の先輩	デフバレー：中学部の担任であった体育の先生、デフ日本代表監督
パラスポーツ開始場所へのアクセス	ガイドヘルパー		
パラスポーツ開始前のスポーツの影響　※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	パラ陸上：障害児のスポーツクラブの代表者（パラリンピアン）／パラ・パワーリフティング：ガイドヘルパーとパラ・パワーリフティング連盟のコーチを兼務している指導者	家族、競技活動を支えてくれている人々	デフビーチバレー：妻（元デフバレーボール日本代表）、デフビーチバレーボール協会の理事長であるU氏
パラスポーツ継続状況	13歳から水泳大会に中高と出場。陸上は15歳から。車いすマラソンから始めたが視覚障害の影響で困難を感じ、徐々に距離の短い種目を選択、視覚障害がある中で肢体不自由のクラスで競技を続け全国大会に出場。 パワーリフティングは39歳から。徐々に重いバーベルを上げられるようになった。連盟の関係者が運営するジムに入会し、アジア・オセアニア大会にも出場して自己記録を更新。	大学1年時に初めてデフバドミントンの大会に出場。大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンのクラブに月に2回程度参加した。2年からは日本代表になり、国際大会に出場した。 大学を卒業してから6年ほどは、仕事の後ほぼ毎日、複数の社会人クラブで練習した。結婚を機に関東から関西へ引っ越し、仕事と子育てを両立しつつ週1、2回2つの社会人クラブ、2つの大学を拠点として競技を継続。	聾学校中学部でバレーボールを始め、B高等学校進学後は関西のデフバレーボールチームSに所属、高校、大学と2度のデフリンピック参加を果たす。大学卒業後はO市役所に勤務しバレーボールとビーチバレーボールを並行して行っていたが、2018年にT株式会社に転職後はビーチバレーに専念し、ビーチバレー大阪代表として、またデフビーチバレー日本代表として活躍している。
支援	勤務先	勤務先／公的機関	勤務先
将来ビジョン	定年までパラ・パワーリフティング選手としてパラリンピックを目指して活動していきたい。	競技を続ける中、選手そして人として成長させてくれた家族や仲間との大切さに気づく。2025年のデフリンピックに集大成として出場し、メダルを獲得することで、応援してくれた人に感謝の気持ちを伝えたいと思っている。デフリンピック後のことは現時点で明確になっていないが、次世代の選手を育成していきたいと考えている。	公務員と民間両方を経験した教師はなかなかいないと思うので、教師になるのも選択肢の一つ。さらに上を目指すために、競技と向き合う時間をより確保できるアスリート社員も射程である。デフビーチバレーの選手が健常者の試合で活躍することで、デフスポーツの認知度と競技力も高まる。現役の自分たちが健常者の大会で結果を残し、デフビーチバレーボールの存在を知って応援してもらえるよう頑張っていきたい。
その他 特記事項	肢体および視覚の重複障害であるが、単一障害のクラス分けに合わせて大会に出場するため、不利になる。 肢体不自由、視覚障害のどちらの障害特性も理解している指導者は少ない。 肢体不自由者のスポーツ指導の経験はあるが、視覚障害には知識がなかった指導者が、視覚障害についても勉強して知識を得てくれたため、効果的な技術力向上につながり、パワーリフティングをやる際の不安が解消された。	聴覚障害のある人がもっとスポーツを楽しむためには、コミュニケーションのサポートが一番大事であると思う。バドミントンの練習時に、手話通訳等がなければ、具体的な技術、それに関わる動きが理解できない。指導者の動きを真似するだけでは技術向上につながらず、楽しさを感じることができない。活動時に情報保障がなされることで、いろいろなスポーツにもっと多くの聴覚障害者がアクセスできると思う。	ビーチバレーボールは砂の上で動くため、高い身体能力が必要であり、コミュニケーション能力や人間力も備わっていないとチーム作りもうまくいかない。様々な要素が求められるので簡単ではないが、ビーチバレーボールでの学びが自身の成長を助長しているのは間違いないと感じている。

書籍及び調査報告書のデータについて

本書籍のデータは当財団ホームページにて公開しています。
本書籍のPDFデータの他に、過去の報告書データ及びシンポジウム、他イベントのデータも掲載しています。

ホームページアドレスはこちら ⇒ https://www.ymfs.jp/survey/

障害者のスポーツキャリアを考える

100 人のインタビュー調査から見えてきた選手の実態と特徴的な事例

2026 年 3 月発行

発行者　公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports　（YMFS）
〒438-8501　静岡県磐田市新貝 2500
TEL 0538-32-9827　FAX 0538-32-1112

印刷・製本　笹徳印刷株式会社

ISBN　978-4-9910824-7-4

ⓒ　ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しを YMFS にご送付ください。